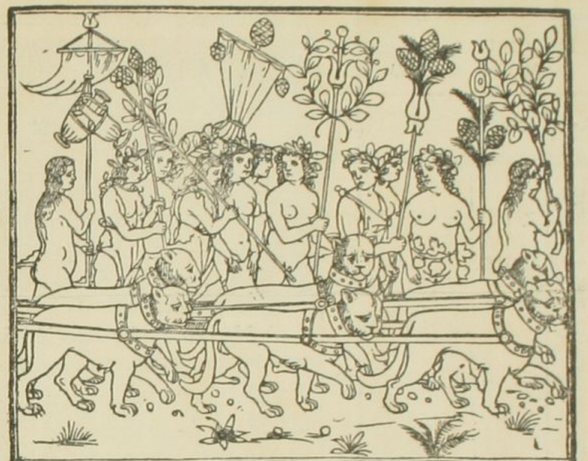
自娛雜錄

特別
14
1919
440

176705

自娛齋叢書

昭和七年四月上浣起筆

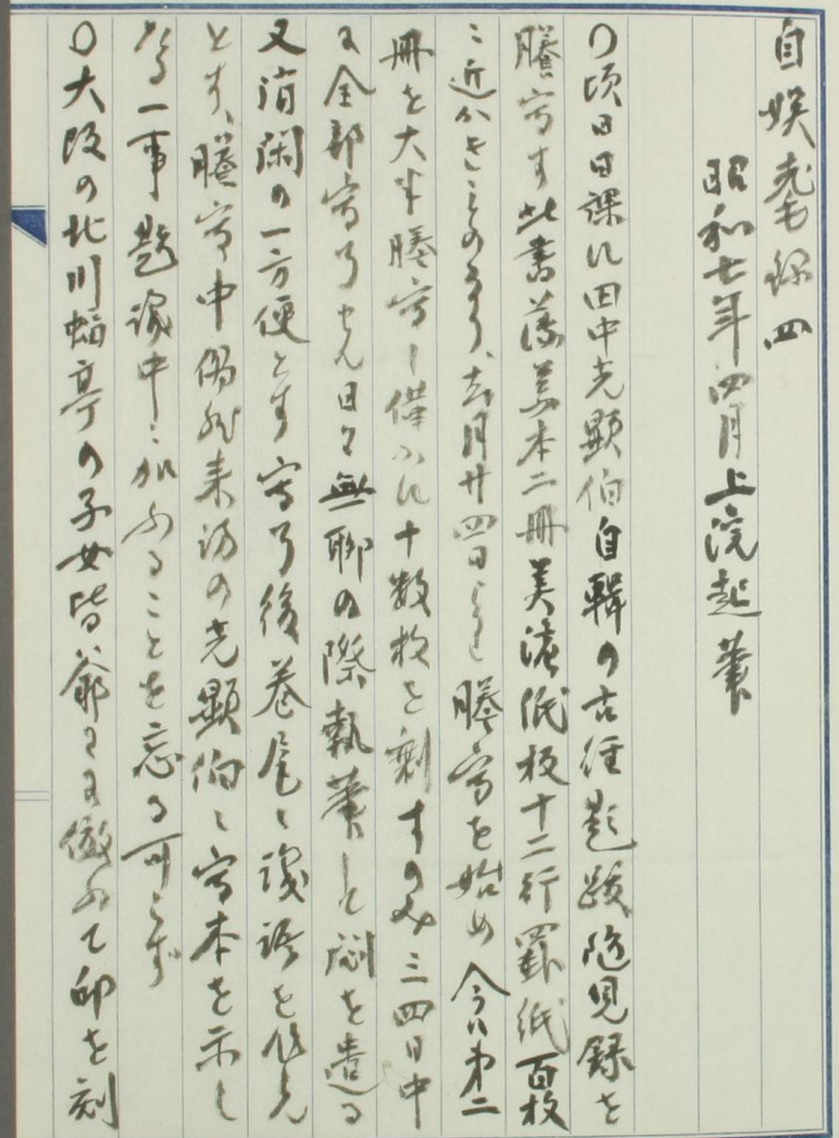


LA MVLTITVDINE DEGLI AMANTI GIOVENI, ET DILLE DIVE AMOROSE PVELLE LA NYMPHA APOLI PHILO FACVNDAMENTE DECHIARA, CHI FVRO-NO ET COME DAGLI DII AMATE. ET GLI CHORI DE GLI DIVI VATICANTANTI VIDE.

LCVNOMAI DI TANTO INDEFESSO ELO quio aptamente se accommodarebbe, che gli diuini' archani diſertando copioſo & pienamente poteſſe euade re & uſcire. Et expreſſamente narrare, & cum quanto di ua pompa, indeſinenti Triumphi, perenne gloria, ſeſti ua lætitia, & fœlice tripudio, circa a queſte quatro iuiſi tate ſciuge de memorando ſpectamine cum parole ſufficientemente ex-primere ualeſſe. Oltragli inclyti adoleſcentuli & ſtipante agmine di inu-mere & periucunde Nymphe, piu che la tenerecia degli anni ſui elle pru-dente & graue & aſtutule cum gli acceptiſſimi amanti de pubeſcente & depile gene. Ad alcuni la primula lanugine ſplendeſcéte le male in-ſerpiua delitioſe alacremente feſtigiauano. Molte hauendo le facole ſue accenſe & ardente. Alcune uidi Paſtophore. . Altre cum drite haſte adornate de priſche ſpolie. Et tali di uarii Trophæi optimaméte ordinate

第十一圖　伊太利の古版本ハイプネロトマチアノアルダス版（一四九九年）

38-9226



自娛齋叢書

昭和七年四月上浣起筆

この頃日日課として田中光顯伯自藏の古往來版數種を謄寫す。此書落葉本二册、美濃版枚十二行罫紙百枚ばかりにて、昨年四月より謄寫を始め、今日まで三四日の中斷を除きては殆ど毎日怠らず、謄寫中偶〻未讀の光顯伯自筆の書入ある古本を示されたることを忘るゝ事數回、加ふるに大阪の北川蛤亭の子女階爺さまの傑作にて卯を刻

まいる四年前今津八幡町に住て玉さる申と仕る
名るべきことのあり、今次福亭卯満を以て宮ゟ
来る、雪しを童真印今印集と高、四冊に分ち四冊の印
を収む、長久誠一二年廿 梅子梅先輩 法玉梅 時先く
印譜あり、年歯に依り甲乙ありきあり、表六冊の
体に倣ひて時豪放の気あり、おのべし 往年見る時
より進境あるを喜ぶ、田福亭趣味の兄弟を有する
を慶祝福しても可也

○前日九浦に入りて西洋笛数を還羅人形と共
の約あり、一昨日来訪その好を受く一函十個の人形を收
む時々拇指大のお品也土製彩色もあり時々スリかへあり
身体の上部のりボンやうのものを着せ女人の時気を隠し

模原製

をみる、宮中の宮女湖に住しそこんを化るとも女をしがちる
く素人離れしと物心うり、何とそ西洋女子のふと
思ふ七る味もあるが、女人等ハ陰を横臥る近い態を為す
こん風遊羅風俗の特徴うそ之を以そ真を弁別すべ
し、

○生後九十五日の高寿で物故された一婦人の臨終し際
る庶子と共を庶子と入れ先別をしちべきやをや
の討論が家庭に起る庶子の許すことをの
九とそれがその庶子の親ハ三十歳人あつて中まい
まふ母ハ兄七交そのお九とを一緒るを喫する、三
十八位のお供を有つことハ迄くもしも珠くくるへとい
云へ家庭おこ斯くも多数の子女を有する例のあまる

ずうっといえんが実服の女房を産んだのであらうか、満字
九工口にかけても豪傑ぶりを失はぬ。
○七日お中ってうっかり花侯爵夫人を訪ふ事を忘れ
ましと上野を通って散策を試みやうと門をステーシ
ョンに入って見ると。流石は今日大衆を吐き出す
ほども先後をかえりみるやうな元気はなくって
みるやうな元気はなくって、地下室今も重
ぎ喫茶しより現象をのぞいて、依然として殺
気なし。この停車場は零災前から日陰分お
粗末のうえに年寄が如何にも不平の
気をそそっているが。災後復旧の停車場と云

あとらうの混雑は災中の混雑をうつすかのやうな
きこともあるが比較的、無茶苦茶が如
く改善加減無を見せるのである。花のチうおう咲いて
三四日を経過するやうな思ひのんだ。
○名家私邸若干を歴訪らん来り見まくほあり。如
斯中に置くべきが未だ決せず即蛇左のみ。
○大名屋敷の落款あり。東坊城の印と可笑の
鳥自の落款あり。片桐不侮者の印と「安永戊成秋月吉
復陰原逸敬鐫」岩年六十有七」とあり。不備前片桐
且元の裔にて茶人也の家に蔵
金が手に落つ　四月十三日追記

北斗歌の印終に

四月八日記

公武合体派の人　北人の記録
宮内省に入れ
東坊城　苔原伝長

伴柯石州印

今の處貴族院
議定官柳原前光
卿の祖父に當れ

北人の子孫宮内
省図書寮に仕
ふ

○三十有七年前の此月此頃孩兒芳雄を喪ひ、棺を蔽ふ
烟煙の暗き即ち神田猿楽町の僑居の梅を採つて
匆々早く三十七年を経過したことを想ひ起す。鳥兎
犬養木堂の子健と同甲ろう今若健在七旬大壽
も終りたいれと老眼涙をさき能はず、高吠の浄土洗
の為供養をなしたりとの報知り、追懐のまゝとゞ
ます

四月九日記

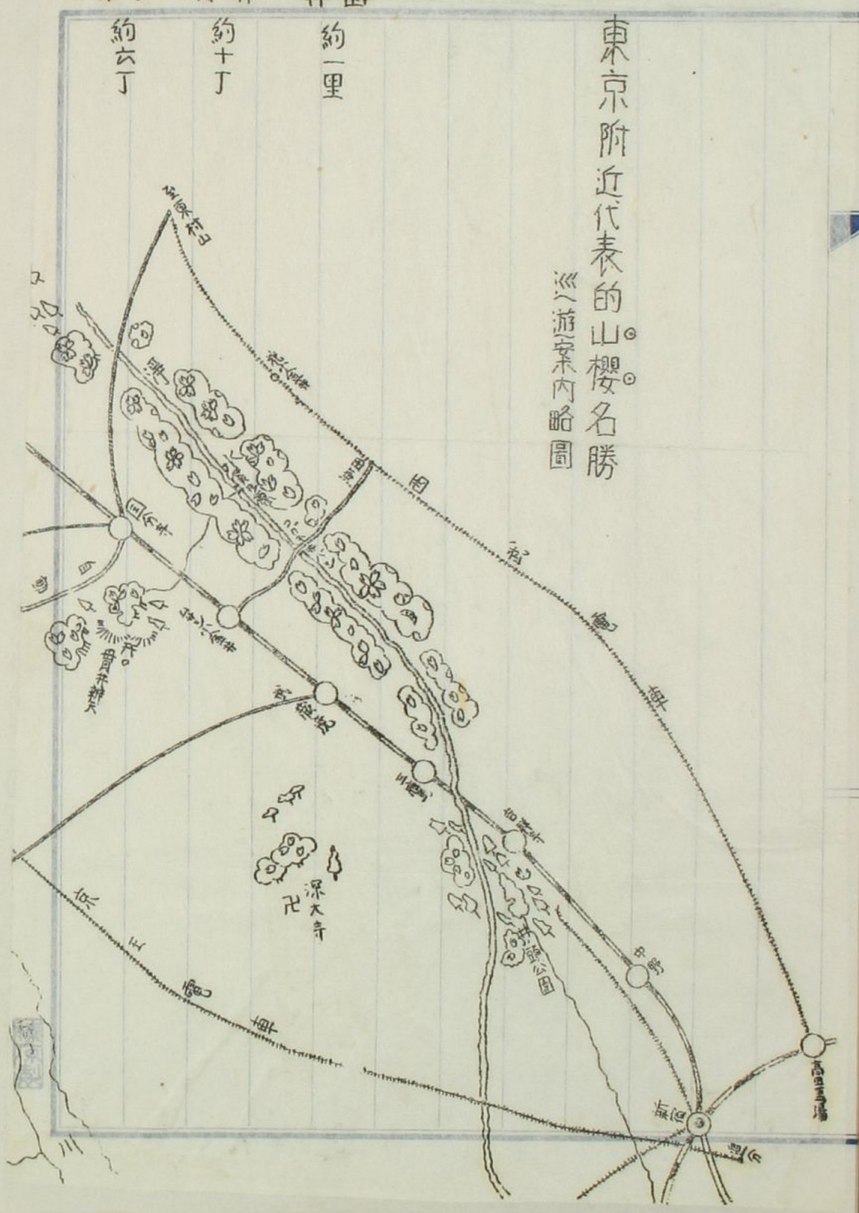
○梶の研究をするものあるを
聞く事多年にして、修まるもの
事を一日中記り四時過ぎまでも一気呵
成す。

四月十日

東京附近代表的山櫻名勝

巡遊案内略圖

自井ノ頭公園　至小金井　約一里
自小金井　至貫井辨天　約十丁
自関戸　至連光寺　約六丁

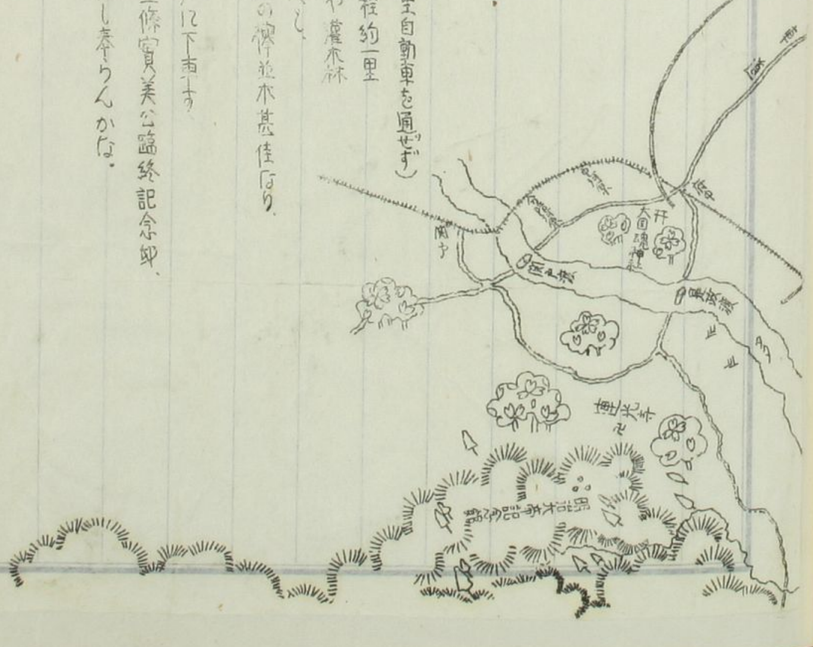


東京近郊山櫻名勝行樂一日程表

（山櫻開花好季節、四月十五日ヨリ二十日頃）

訓鳥八十六

一、省線吉祥寺駅ニ下車、先づ井ノ頭公園の山櫻を賞觀し、
櫟林をよぎりて玉川水道ニ出で、小金井櫻郷ニ至る（此間約二里自動車を通ぜず）
小金井ニ櫻ハ我國の山櫻王國中の最優なるものなり、此間行程約一里
一、小金井堤ニて飽く迄山櫻を愛觀し、貫井橋より左折し田畑や農林
を辿ること約十丁程ニて貫井辨天ニ達す、境内の山櫻賞すべし
一、夫れより村道約五丁を経て自動車道ニ出で、府中ニ入る沿道の櫻並木盛佳なり
一、府中大國魂神社境内山櫻の風致忘じ難し
一、府中より京王線ニ投じ、道途分倍河原の古戰場を偲び、関戸ニて下車す
一、関戸より約六丁すれば即ち連光寺櫻堤なり、明治六帝駒止碑、三條實美公臨終記念碑、
感慨最深し、進んで明治大帝記念館を拝して御高徳を追憶し奉らんかな。

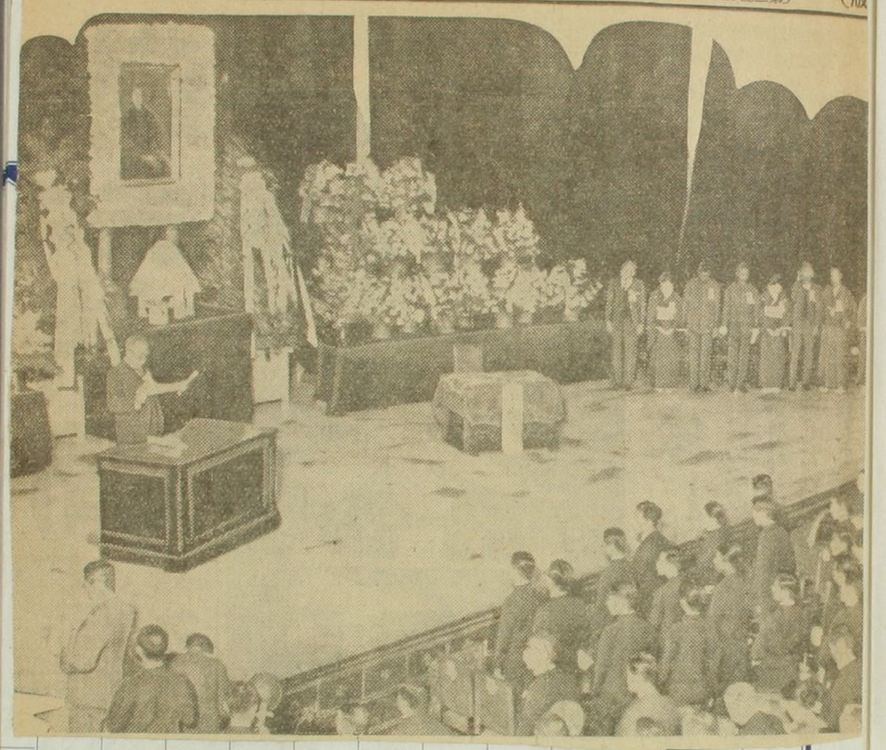


の営は大隈侯十年夫人九年を合せその大隈家の葬典が
墓所に行はれ、午後は大隈令嬢と侯夫婦の写真も
置き千餘の人々拝礼を許され、自今も朝から典
かつ此が明る盛会ひもあつた。あの国民教葬令の
式を行ふ事りで、こんへ自今の様任び約一年準備も
努力しも其日が来ぬのと氣をつかうが幸ひ好晴を得たのび欣
ぬと云ふ程くぬ、あの果して盛会を開し得るか疑ひ
入ら抱心分もんが、こんな式典を様任することもく
る氣骨が折れる。志かし自分ともも十年の追悼
式を様任することが出来て実に時の国民葬も実に余の幸ふ多

標原製

第端自分が任じて其日未曾有の盛況を呈しそ
その日しも余が十年後の今日亦国民的追悼の
式を様任することもつ此のも不思儀の縁因で
ある。国民葬を営んだ時は自分の六十三年で
まだ元気も旺盛びもあんだけの大仕事と二回も
ルの不断の努力でめやうのび、八をして感歎せし
めたが、今は七十二の頽齢で最早隠左の身分び
あるそれ、始めを様任しし以上は最後迄も様任
任することと云ふ昔に屈せず費くことを得ると云
ふ本懐此上のことびある。此の終始二回のこ
とも唯此一時の事務も迅速いけんとも美の美
後るは八十五年史の編纂事業があるとも

第一萬九千八百四十九號　（第三種郵便物認可）　（版）



まこと文字通り兄弟の編纂事業であり共に他人の手を成つたといふ点に於いて校閲の責任は自分のそれよりも一層重いものがあるのだ、こんな相當苦労してゐる。云はゞどれも皆自分の緣の下の番持ひ、裏方やつて居るやうなもので、それだけ榮もあることゝ思ふ。斯くも多數の人の心服を得し難くつゝある。斯くも多數の人もみうるまへ、先づ此點を諒としてゐる日人も少なからざるのが成功すれば共に民衆で成功したるも、今自分の緣の下の努力を極ると云ひ得ざるなり（四十一日午前）

標原製

故大隈侯十周年

國民的の大追悼會

昨夜日比谷の感激

一世の偉人大隈老侯逝いて十年、時たま〳〵國歩多艱に際會し、老侯恩讐の總計はつひに優り十一日午後六時半から日比谷公會堂で國民的の大追悼會が催された、この夜會場には定刻の四時半頃から老侯と縁深き方面の名士二千餘名の外、會場には定刻の四時半頃から老侯と縁深きとより老侯を慕ふ各階級の人々が續々とつめかけて早くも滿員となり、門外にも多數見え、國民的追悼の夕にふさはしく、また若槻男、床次鐵相、德富蘇峰（代讀）三氏の老侯追悼の講演はそのまゝ會場から全國へ仲繼放送され、會場内には十年前同じく日比谷で行はれた國民葬に次ぐ哀情、追憶の感激的光景が展開され、同九時過ぎ會義深き夕を終つた

追憶深き參會の人々

老侯の肖像もさゝやくかに

式に入るに先だつて午後五時から市政會館内東洋軒食堂で參集の名士二千餘名によつて發起人賛成人會が催された、市島實行委員長の經過報告の後、大隈信常侯爵一族を代表してねんごろな謝辭を述べた後

テーブル、スピーチに入つた、土方寧博士を初め老侯のお關係者であつたといふ關係前代議士等々後から〳〵老侯追憶談は盡きず同六時半いよ〳〵式に入り司會者山本達雄男の挨拶の後、全員起立して正面祭壇高く飾られたイタリア、トルナイ畫伯の筆になる老侯大肖像にしばし默禱し續いて老侯と縁故ある日本移民協會外三十二團體から獻花が行はれ、本社を代表して

寺田副社長

より花束を捧げた、次いで山本男花輪に埋づもれた祭壇を前に見入りながら祭文を朗讀したが、感慨が感極まつて聲もとぎれた、犬養首相代理として儀禮部藏の首相の談話そのまゝを朗讀し、瀕死老侯追悼の念に凍らんとした時、早大應援團によつて西條八十氏新作の老侯敬慕歌が數百の女子大生、早中生斉唱で演奏され老侯を思ふ哀情なリズムが流るれば祭壇の脇に並ぶ

大隈信常侯

夫妻を初め近親の人々は厚き感謝の涙を浮かべ着白き電光をあびた老侯の肖像も心なしか何事かさゝやくかに見えた（寫眞は追悼會）

樣原製

○此十一日の大隈侯爺祭、今の豫約なき盛況を呈したる事をもして大いに滿足せしめたり偖こゝまでの進行は一年間幾多の苦しみや遠碑なき時日を要したるも其外多數人を一人も募集せず全体の金を募ろうとする執向であつたる為のである、第一今が振つて居る時節柄寒さ厳しき折柄、前の國民葬との平成の谷間ず、人寄せの為めの心を碎いた、生憎多數の人衆を持つ早稲田大學の校庭を使ることの出来なかつたる不便の一つ、中學ありその生徒を駆り催して芝公園の芙の銅像前と集合せしめ散葬歌を歌のせて今佈を練り込ま

角不完全ながら両意の人物をも
が之れの可き骨が折れた
取て當日の五時ごろ始まり九時
ラムで講演の中休で全員を放
時間を誤らめやう進行せ一とし
を迎へたが当人許の人が入場し
次つて満員のので幸先よりと先ず
ハ実行委員長として昨年来此の
を報告し大変喜ばれ御許
義先の放送）而の外六時ごろ
事を放送することもあつたので
出うけ、二十五分間放送）をし
（模原製）

ることの今度が始めてであるので、できうかぎり子供の
味を授する話を立案するの可き頭を学んだ放送
をもつて直ちに会堂と戻つて見ること、入口も満員の
札が始まれ拳銃のように人を刺して居るのを見
始めて事業のようなことを感じてあつた。式前で、見物
つて見ると、まだ開式前で、見物さへもさうもの多い会堂
こと鉦の如を鳴らすと聞こえる先生の音楽と愉快を覚へ
が、間もなく幕が上つて先生の電鍵が鳴くと
共に模糊の背後の姿とハッキリと現れた満場一斉起立
して敬礼を表したのち先づ三十
国体を誠先生を為すことと
初て開会の辞あり続いて各支部の
挨拶を棒げ、次で音像の

左右に顧を巡きそれぞれ十五ヶ所ずつ式場と光彩を添へた。こんい近頃の立派な神官の供膳などは比し北方がはるかに美やかであるので、献花の為三十分の時間を費しなければ、人衆も退屈を感じ、一種の感興を以つて之を迎へなければならぬ。献花が終つて司会者の山本男が追悼文を朗読した北の文が杉平康画の稿を俟つて印刷して芳紀人に配布して置いたが満場(朝鮮中)悲痛に堪えない文である。次で敬意を捧げた。終つて大養首相の追悼辞を予息の健氏が朗読した。こんい全く形式に拘はらぬ談話体のものであつた。実に前日大隈公社に首相と面した時見合らも報ひ得る場合である追悼談をなすべく式場で朗読しないと雷めた

(標準製)

のが、聊か手をかくて余の花と云ひたいものがあるが、人情味が豊かであるとかで満場の感興を惹いた。こんも続いて成功であつた。式の終りに早大のバンドが西条八十の応歌を奏した時、何かが欠けたかの如く感じた。(後略)

かくて、式後を背景として講談会を開いた北の講演は全国で中位(後略)まるかがあるので、別名の人衆の耳を入るのである、個故ならことの出来ない大隈の遺徳こ物をうるを得ない。着概床次の講演は各十五分間で簡単ながら要を得て意態が重いと沙へ北がいい病床から苦杖を突いて、徳富が傍に肝腹病に罹つたので副島八十六が代読した。徳富八平生の親味をぬきんでて満腹の家蔵を傾けたのは理

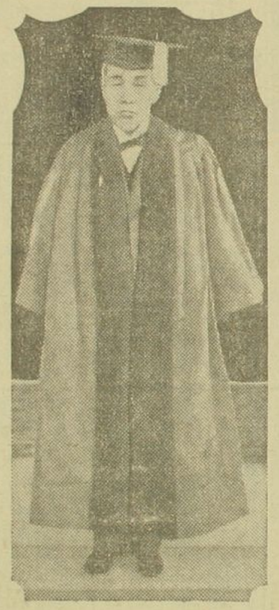
外であつた。
講演後今泉を招いて慰労の宴を開いた。
映畫を観ることゝ、侯が庭園を散策することゝ
究から侯を見ることくらゐ拍手をした。
注の函添の映畫、これこそ
笑こ次き最後南極探検の映畫も示した。
そしてハ時比上るいものであつて、老侯を
めれのもよい風もあつた。
八遺憾ながら成功した、昨日の
萬の費用をかけたが、共等の
年四月十三日記す。

物認可

故大隈侯逝いて十年

懐しのガウン姿で
新しき銅像に再生

早大五十周年記念事業



都の西北、早大學園にそびえる大隈侯爵の大隈侯の銅像は昨年度、今はき彫刻家小倉惣次郎氏の制作にかゝるものであるが故侯逝いて十年、殊に今秋は學園創立五十周年を迎へるといふのでかねてから學園の名において五十周年記念事業の一つとして銅像建設の議が起つてゐたが八日の維持員會で決定、制作を朝倉文夫氏に依嘱した、銅像は恩賜館の前、校庭の眞中の像定で大學總長のガウンを着てゐる立像で高さ八尺五寸位の堂々たるもので台石その他の設計は同大教授佐藤功一博士が當ることとなつてゐる今秋十月廿日の創立五十周年記念日までには完成を見る筈であるが時あたかも高田前總長の銅像も目下朝井閑右衛氏の手で制作中なので同時に除幕式を擧げる運びとならう、なほ小倉氏作の現在の銅像は大隈記念館に安置することになつてゐる【寫眞は生前のガウン姿の故侯】

十年祭に祭料下賜

重信侯の十年祭が十一日執行される趣きを聞れされ、九日特別の思召しを以つて特に祭料金一封を賜はる旨勅内沙汰あらせられた

榛原製

○大倉雨村ハ吾郷土ノ画家ニシテ支那ニ赴キ彼地ニ於テ南画ヲ研究シ帰リテ吾郷土ノ画家中南画ヲ称スルモノ此人ヲ推シテ其一ト為スヲ得ベシ余若年ノ頃前年寓画一幅ヲ獲テ珍蔵セシカ久ク美雪ノ窓裕ニ依リ之ヲ典ジ代ルニ一紙モアラズ、偶ニ書画商ノ来ルアレバ聊カ書画ヲ購ヒ求ムルヲ以テ浅俸山入ヲ画ス寓書ヲ得ルヤ即二軸徐三ズト雖モ雨村ノ真蹟ヲ見ルノ一挙ヲ捨ツル能ハズ今ハ庵中清々タルノミ余雨村ノ初印庵ノ刻ニ係リ文政癸酉ノ刻ヲ見ズ、此ノ徐三庵ノ刻ヲ獲タリ、不用ノ悔ヲ無ラシムルヲ之レヲ獲時昭和十年四月十三日也

○故某上野ノ陵苑ニ墨堤ノ満開ノ桜花ヲ観文行

複原製

来ラン之ヲ主人ニ乞ヒ来ラン回書ノ○康熙字典一部四十冊岡本況斎校正本ニシテ今多雄氏ノ蔵書ノ印記アリ冬冊無疵庵ノ印記アリ書名ノ筆ハ況斎ノ筆ニシテ況斎ノ校訂ハ表且寮ニシテ冬紙ノ髭題書入ヲ缺クノミ少ナク珍書ト称スルモ可ナリ玉ノ篇ヲ紙縒ノ多キコトハ日本学界ノ権威ト称スル某学者ガ一々訂正シ校訂者ノ誰ンタルヲ知ラズ或ハ一部本ニシテ重ノ者トスルモ山梨稲川ノ手沢アル康熙字典ヲ校訂者トスルヲ以テ貴ノ者トスルガ如シ余嘗テ山梨稲川ノ手沢アル康熙字典ヲ見ルニ校訂ノ文字ハ悉ク冬紙ノ髭題ニ稲川漫亭ノ字アル

良寛和尚の書に就いて

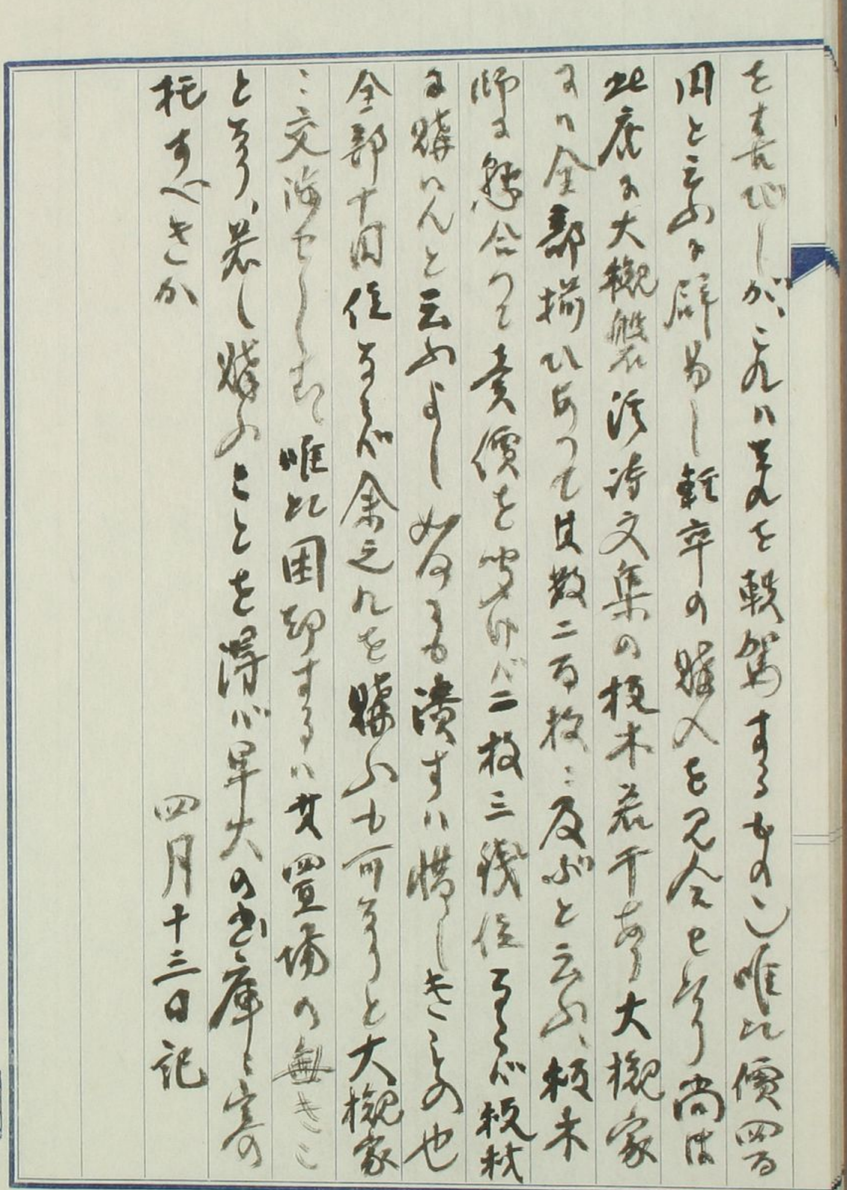
安田靫彦

私が書といふものに本當に興味を持つやうになつたのは始めて良寛和尚の書に接した時からであります。良寛の名はこの時から私の心に深く刻まれた、と同時に、弘く書といふものに就いて知り、また味つてみたいと思ひ立ちました。

私はまだ書に就いてお話をする自信を持ちませんけれども、其後だん〳〵書に就いての視野が開けてくるほど、良寛の高い姿がはつきりし、書道に於けるその位置の立派さを確めらるるやうになつて來るのであります。

良寛の言葉に「われに三つの嫌ひあり、料理人の料理、歌よみの歌、詩人の詩、また書家の書」と、これは有名な言葉になつて傳へられてゐます。藝術と職業とは引離したいものとわれらも考へます。歌や、書の如き單純な形式を持つた藝術に殊にそれを望みます。支那に於ても、日本に於ても古代から中世までの名筆は、みな當時の高士、縉紳、或は緇衣の人たちでありました。大政治家や、將軍に書聖とも仰がるる人が出てゐるのであります。近世書學がやかましくなり、專門の書家も輩出し、書道は隆盛を極めて居りますが、書の實質は降つてしまつて、面倒な法則や、把筆の末に沒頭し、甚だしく技巧化されて了ひました。然しその技巧は古代のやうな、匂ひの高い複雑な味を持つものと違ひ、只管筆技の達者を尚ぶかに見えます。達者といふもののもつリズムは甚だ單純であつて本當の生命を逸します。また匠氣の此處に生ずることも否めないのであります。近世の諸人傑も皆臨池の技に親しんだが、其中に藝術味をもつものが甚だ寥々たる所以は、所謂書道といふものによつて書の觀方が根本的に間違つて來てゐるからと思ふのであります。

良寛和尚が晉の王羲之、唐の懷素の法帖を學んだことはその消息によつて知られ、この晉唐風が和尚の書の土臺となつてゐることは、また其の書風の上から見ても明らかであります。王羲之はいつの時代にも書道の宗師として崇められ、其の傳統をもつ隋、初唐の諸名家と共に書道の典範とされてをり それら



晋唐風の法帖は書を言ふほどの人にして座右に具へないものはない位でありますけれども、近世の書人には素直にそのいい精神をうけいれたものを見ないやうであります。宛も徳川時代の萬葉學に通じた歌人の歌が、萬葉の精神に觸れてゐないのが多いといふやうなものでありませう。良寛はその周圍の世界にかけ構ひなく、書にも歌にも、まつ直に偉いなる古人と面接してをります。

良寛の書を初めて見たのは假名でした。その高古の氣品、豐かな雅趣、それからその妙を盡したかと思はれる自由で、しかも自然な線の驅使、そして神經の顫へてゐる尖端を、そのまま紙面に現はしたといふやうな微妙さ、神韻縹渺とはこれだと思ひました。

上代の假名には實に巧みを極めたものがあります。あれは支那にも類を絶し、日本獨得の長所を發揮したものであります。貫之、道風、佐理、行成、と傳へられてゐるものの如きは實に立派なものであります。それらの優婉の內に持つ筆力、あの端正巧緻を盡した美觀に對しては良寛は比べものにならないかも知れません。けれども何故かわれわれはより多く良寛に惹きつけられます。彼等のは貴族的であり、技巧的であり過ぎるところに自然味の乏しさを感じます。もとより遺品の多くは、その性質が餘所ゆきのものであり、また時代相や、生活の違ひもあぼつぼつりと切れてゐます。連綿體は日本假名の特色であります。我々とは親しみに少しく缺くるところがありま

良寛には餘所ゆきが無い。掛物や屏風を書く場合でも、足袋一足の注文をする手紙でも殆ど同じ氣分、同じ心の動きで書いてゐるかと思はれます。良寛の筆の速度はいつも同じ寛かさを保つてゐます。立派なものに書く場合でも改まらぬかはりに足袋の注文書にもかなりな興味をもつて書かれてあります。良寛の持つ味ひは、貫之、道風よりももつと古い假名を想像させるものであります。其古趣に含まる原始的な素朴味と、更にくだけた平民的な飄逸さとを持つところに、われわれに話しかけてくれる親しみを感ずるのであります。

良寛が古い書を評した辭に「筆力遒勁且清新」といふのがあります。ここに使はれた清新といふ文字こそ移して良寛の書を評するに適切なるを覺えるのでありまして、われわれを惹きつける點の中心もここにあるかと思はれます。清新は何によつて生れるかを論ずるは避けますが、決して只目新しいものが清新ではありません。われわれは古代のものに永久性を持つ清新を感ずるのは何故でせう。六朝のものなどには最も適例を見ます。日本のものでは聖徳太子御筆と信ぜらるる法華經義疏の如きを拜見すれば實に清新の氣に滿ちて居ります。私かに考へますには規矩に據らずしてよき個性の發現されたものほど清新の耀きを放つのではないかと思ふのであります。

良寛の假名には所謂連綿遊絲の體が希れで多くは所謂獨草假名であります。匆卒の手紙でも、字と字が連續することなしに、

ろに拘はらず、良寛がそれを用ひないのは秋萩帖を習はれたといふばかりでもなく、勿論不得手といふ理由とも思はれません。現に大字の草書には盛に連綿の妙を發揮してをり、また連綿假名にも全く例がないではありません。良寛の書を仔細に觀れば可なり上代に肉薄する巧みさを持つて居ります。然し良寛はその巧みといふことを甚だ嫌つたやうです。で、思ふに、良寛の假名に連綿の風の少いといふことは、その婉美に過ぎるところを避けられた故でありませう。良寛の假名も時により書風にいろいろの變化を見ますが、初期のものには秋萩帖の影響が著しく現れてゐます。道風の書と傳へられるこの帖は、高雅で舒かな、いかにも良寛の欣んだらしい書であります。やや遲澁の感があり、模本といふ說もある位で澄澈の氣に乏しいやうでありますが、所謂獨草假名で、草假名中最も古い形式を傳へてゐるものです。

秋萩帖の系統とも云ふべきもので、傳佐理の拾遺集賀の歌切は遒勁な老筆でありますが、良寛の假名に、これに似て、然もこれよりも勝れてゐると信ずるものがあります。尙又これに一段古蒼を加へたものがあります。强ひて類を求むれば道風の本阿彌切の持つ味を思はすもので、良寛の假名中でも此體は最も獨自の妙域に入つてをり、紙背に深沈の力を湛へてをります。

楷書は何によつて研究されたか研究の餘地があると思つて居りましたが、たまたま和尚の詩の中から痩鶴銘を臨されたことを知り得ました。かの六朝の痩鶴銘は德川時代に日本に知られた唯一の六朝碑であり、無數の六朝碑字を見得る今日に於ても神品の座を降らない名蹟であります。良寛とあの渾穆な痩鶴銘との間に通ずるあるものを知つたのは又なき欣びでありました。私はすぐに和尚の筆になつた新潟の飴屋の大字の看板を思ひ浮べたのでありました。

良寛の楷書は多く小楷であつてまことに簡古な姿です。堅く冷たくなりたがる楷書にもいつもの良寛の性情がそのまま流露されてゐます。行筆艱むがごとくつつましやかな線が引かれてありますが、その線がだんだん鐫り込まれてゆくやうな力を感ずることができます。それは宛らわが上古の金石文字のあの高古な味ひであつて、古い御堂の中で磬の響でも聽くやうな幽かな韻を傳へてゐます。

大字の草書に多く詩を書いたものをみます。この方は懷素の自敍帖を思はせます。懷素の遺蹟は法帖を通じて見るので本當の面目はわかりませんが、自敍帖は此の筆者の他の帖より優れてゐるとはいへなくとも、奔放な所謂狂草體である點で最も懷素の面目を出してゐるものであります。良寛が手澤の存する刻帖は今日にも遺されて居り、良寛はよほどこれに親しんだやうでありますが、まつたく懷素の域から卓出してをります。良寛に比べると自敍帖には書師の習氣が存すと言へます。

良寛の書には多量の創造があります。たとへば字と字の組立にも自由奔放な試みがつぎつぎに現はれて來ます。飄々として

心のおもむくままで、時には奇姿縦横の姿になります。奇は多くの場合厭味なものであり、親しみがたいものでありますが、良寛の奇はいかにも自然さを持つほほゑましい奇であります。古藝術を通じ繪畫にも書にも彫刻にも示されてゐる美しい奇であります。

良寛の書は讀みにくいことが有名であります。(草書に通じてゐる人はそんなことはありませんが)脫字なども一向平氣で、一絶句の中に二字も三字も落ちてゐるときがあります。さうしたことは構はない人かと云ふと、手紙などはわかり易く書いてあり、字にも文にもやさしい情味が籠つてゐるのであります。

良寛の藝術的天分の豐かさには感心します。また藝術的理解の深さにおどろきます。全幅が一つの立派な線の構成であると思ひます。線の節奏、墨の分量、布局等に實に透徹したる理解を見ます。いま絶句を書いた三四行の草書幅を見るとします。そこには自由に引かれた線の不思議な流れを見るばかりで、すぐには讀み下せないばかりか一字一字の切目すら惑ふでせう。一行のうち二字三字窘蹙して一字のごとく、また大なるは弛長して二字のごとく、奇姿を極めて居りますが、靜に全幅を觀て居りますと、字字の間に起る律動が次第に大きな波調をゑがき、飄々として心のままなる線のゆきかひが、異しく美しき統一を以てをはつてゐるのを覺らるるでありませう。

また一幅中の點の分布を見るだけでも愕くほどうまいものです。それが豫定されることなしに筆のままにまに作られていつて居ります(作るといふ辭は不自然にきこえるほどに)そしてそれが自由無礙なものになつて現れてゐます。殊に墨の濃淡、活殺、線の隱顯出沒の工合は妙を極めます。見事に作られていつた曲線が突如として中斷されると、その中斷された線が紙背を潛つて飄忽として現れ、また煙の如く消えますが、筆者の感動は全幅の奥に充ちて、そこに心靈の偉力が輝いてゐます。

書の方では萬能の神のやうな王羲之や、其他初唐の名家たち、眞蹟の殘つてゐる賀知章や、空海などの力量は立派を極めてゐます。けれど、彼等の群が盛裝し威儀を正してゐる中へ、一乞食僧の良寛は平氣な顏でぬつと這入つてゆけるだらうと思ひます。

良寛には畫をかいたものがあります。畫は其友有願といふ人に學んだとの說があります。有願の畫は法橋玉元に學んだと聞いて居りますが、派はしれ習癖を持つものです。良寛の畫はまつたく自分の畫で、どこにも習つた畫の痕跡を見ないものです。ただ心に映るままをおぼつかない筆で描いてあります。有名な坊さんや俳人たちの畫にはふさけたものを多く見ます。それが脫俗のやうに見えるのでありますが、其筆が馴れ、滑り、そして與へる爲に描いた氣持、ある矜り、がその風格を低めて居ります。良寛の畫はいつも眞面目に、子供のやうに一心に畫かれてあり、いかにも自ら樂しんで描いてゐる境地が見えます。

良寛が漁夫や女兒に與へた書や手紙などを見ても、何人にも對等な氣持を向けてゐることがわかります。そのつつましい簡淨な味ひは、畫も書も風格を一にしてゐます。

良寛の書には決して印章を用ひてない、(某家の一點印章のあるものを藏すといふを聞いて居りますがまだ見たことがありません)書畫の款識に印章を用ひることは宋代に起り、近世に至つて必ず具はるべきもののやうになつたのであります。印章を用ひないこの一事にも、その見識と高い趣味性とを見ます。

良寛の書の僞筆が在世中から行はれたことは、相馬御風氏の發見された當時の人の手紙によつて確かめられました。僞筆の作者が幾人もあつたことが云ひ傳へられて居りますが、今日また盛に造られてゐることは歎ずべきことです。古いものには比較的大字が多く、現今のものは多くは假名字で、短冊、色紙、小切、畫贊のものに中々巧みなものを見ます。

良寛の書が早く世に現れなかつたのは、多くの人の眼に觸れる機會がすくなかつたことにも因りませう。有名な書家が僞物に箱書をしたのを見たことがあり、中林梧竹は書卷の末に題して「西行以後第一人」と記して居りますが、書家の評語として甚だ物足りません。道に日下部鶴翁は、良寛のは天才の書だと云はれたといふ直話を人から聞いて居ります。

書史三千年、時代と共に書風は幾多の變遷を爲して居りますが、古文はしばらく措き、その精華は六朝、隋、初唐にあります。筆勢の宕、意態の變、古穆の韻、神氣の生動するもの、之れを後代に求め難いものであります。今日では前人の夢想だに及ばなかつた漢隸、晉書の肉筆が地下から出現し、未知の碑碣、法書が展開され、我上代の草假名の研究も面目を新にするなど、書學はまさに新紀元を造り、あらたに拭はれた鑑賞の眼には、古代の燿きの前に、近代はまつたく光を失ふのであります。

盛唐以後肥厚な書風が興り、宋元時代には渾樸な特異の美を持つ宋元風がありますが書品は時代と共に降ります。日本の鎌倉から足利へかけての宋元風にはいいものがありますが德川期に入つて書は遂に塵俗に落つるを覺えます。寧一山や夢窓國師を始め足利期の禪僧には勝れた書があり、德川期にも徂徠や備中の寂厳などを思ひ浮べます。いづれも宋元明の書風を代表する非凡さを持つものですが、個性の表現、古穆の韻に至つて缺くるものあるを感じます。德川の末に越後の奥に良寛がゐたことは不思議であります。

春遊　龍世華

東陌垂楊西陌花。　綺羅幾處競豪華。

三三五五尋春客。　都醉新豐二月霞。

左に收むる良覺の寄與は實に有益にして感謝に堪へざる所なり。安田の良覺に對する感謝の念は常に心肺を衝くものあること年あり良覺の安田に對する感謝の念と共に永く之を傳へらるべし

○科學の進歩が人間の幸福と安寧とを増すことは大なるものがあるが、科學の進歩が必ずしも人間の幸福を増すとは限らない。科學は世界大戰の時が幸福を絶滅することもある。科學は世界大戰の時が多數の生命を奪ふ事に使用されて、殺人器の改良が次々と行はれ、殺人が容易となつて、殺人器が著しく

列で文字丈けでも殺傷を禁じ得ないものがある。世界の大戰の間に於ける兵器が大なる影響を與へたことは勿論無煙火藥の威力は實に驚くべきものがある。一九一八年獨逸軍がパリー攻撃に用ひたベルタ砲の全長約十二間（二十三尺）で射距離は七十哩（三十里）を達したと云ふことである。尚は電氣砲と云ふのが實驗されつゝあるが、之が實用の域に達すると大砲を工場の實驗さへ出來ないやうになるかも知れない。世界戰爭の產物たる八百

粉の財産を無つ浮べしと主張したものがあるが、果して實行せられる事なれば下ノ關を達する

あるが、恐らく其の実用を供さうと思ひ他の方を主とするであらう。

長距離の射撃に理論と云ふ如きものは未だしもしろ其の障碍物が体のことを考へなければならぬ。見るべき光行機の、或と空気の働きをなしつゝあるの上を爆撃機をもつて一個の巨弾である。長身の大砲を工風するにも北方の工風が有効であるかんがへる。乃ち大砲自身が動いて、長距離のまゝ巨弾を運ぶものであるから、そこに強力のある砲の無い、其の速力や搭載量の多大の犠牲を払ふ。後者は多大の犠牲を払つての上でなければ敵国の首都を狙ふ事が出来ない。

光行機の急速なる行動と同時に爆撃手の技をもが敵もの首都の上空を光行機の来ることをさうぞ此かと思ひます。而うして吾が方の上空から五七の巨爆が要所の後下しをまぬかれ大雷雨の後の如き全都を灰燼と悪がスを撒布もするから、住民は警報の塔初を光かうことが出来ぬ。今の高性光行機の設計撃を防ぐ法が殆り海をへだてゝ北方から迫ることを考へなければならぬ。巨砲ともも米国で無線電信の方向で光行機を地上から操縦

し得ることを発明して
之れが実際に活動をすることもあろう。又た低
九心操縦者一人の力も無
気飛行機を造って、空
力の全部を爆弾と毒瓦斯に搭載
かも来る、唯一人の名手が操縦
る北極の気飛行機の数
機の働きで数千の
球の表面に、魔の命
るものである
爆弾の威力、火災を起すのみ、恐るべきが、元飛行機から放つ
毒瓦斯は生物を殆滅する。うまい工夫

瓦斯も毒瓦斯の
気よりも重く、之れを吸
はるや、皮膚のどの部
及ぼすも即死させるとの
をいだしてマスクを用
ることさえ出来ぬ。ルイス瓦斯は、之れ
るのだ。ルイス瓦斯も亜
こ粉も之れ一滴
と手榴弾大の瓦斯弾
河一つ動物を残滅
とうといふ、乃ち空気
人間が空気を呼吸

免かることのできるものとは、砲台の掩護の後方
世界戦争中より初まりたタンクは、陸上戦艦と呼ばれも各国
つとめてあつたが、これが今や陸上の
る大型のものを以て、重砲をもこんな使
とするまでもつてゐる。初めの畑のやうな乗かいる軍
軌の悩み、運動も廻後、塹ひのあつた、今や陸上の戦
艦とも大切のものとそ、仏もいゝの上タンク
まも完し以て試験済みとされてゐる。敵の砲
弾を探索し機関銃を以て落下する丈
も恐ろしき武器である、日本でも最近無電ひタ
ンクを表のやうし操縦することが成功したとのが、これへ
陸軍当局の長山中佐ギの努力の依るものが、未だ現

複写製

在の時速四五哩であるが、追々発達するであらうと思ふ
れる。

以上のやうな火焔放射器と戦車とは、陸戦に於ける
ものであつて、之れ丈の点にて火焔を敵の陣地を焼却
戦闘の指揮者をして敵を攻撃するものである、又煙幕といふのも
ある、我行動を掩蔽し敵の視線を遮断する煙を発生
為の煙幕である、煙幕を発生する為には、硫黄、塩素、
尚ほ此等のガスの世界の科学者が工夫してゐるよりも
伊国のウイルビー及びエノットの二人が一種の電波、所
謂日光線を応用も遠く離れた火薬庫を爆発
させたり、工場のモーターの電動を中止せしめたり、光

行中の飛行機は故障を生じしめるやうな大気の
しんと傷くらんとみるが、此等
びあらうの為め新発明の工風をせぬ
も迅速にも防禦の工風をせぬ何故ひなどうか、併し
飛行機を飛行中は故障を起さゝることが
実現さるゝことといふべき、その防禦とする目的あ
らう、科学の研究の工夫が今後
らんが、防禦の術も亦科学の
得る四百余の発明の
矣者を待ちて
○川路左衛門尉聖謨の著
り内二冊詩稿一冊、論言概略便覧」と題し

ることを皆な自筆に係る、価六十円也

一詩稿　一冊　　菊亭香

表紙に「従弘化元年十二月至二年四月」と
て文政庚寅の歳旦の発句
廉之左の通り
我従文政庚寅歳、受大谷句渓、時年
及至松四書五経、不幸為小吏、十八、晨夜事力
業、殆廃学、後為寺社奉行吟味物調役
時、林蓮斎問我以疑獄、初得謁見、時二年一夜
論其事、終問学以治天下
為要、先読大学衍義補、有得復乎其要、他

日過仿蕪一南村於蕉軒之東、欲捌詩文問之一言
曰、子の詩文何ぞ笑、士不可不識治乱興亡有時
文之暇、讀通鑑綱目、自ら之日漢二書、傍及伊
洛餘姚之書、不知詩文者、千是四十餘年矣、若
嵩為奈良奉行、貢職雖山外一回之狄、松沈往
昔極閑散、記曰、士無故不徹琴瑟、其莫此時
乎、聴猟徘徊、撰琴瑟吟、詩以遣
陳、乞予卅先生郷、当今年六月廿四日、
生易牖、甚有批評、常陰涙、先生之遺澤可
不報乎、今集五巻以為此四巻云、

嘉永二年八月　　左衛門尉聖漢

聖漢の学歴此の識語に依り大略を知し得べし。

模原型

巻末聖漢の跋文の如き。

一詩稿　一冊　蒲茅本

従嘉永二年従六月至同年七月
収むる所の詩二百五十三

古八
排律四
律七十二
絶句百七十二

一語言概略便覧　後篇　蒲茅本

七々集の跋言をまた考証して便覧に備えるもの。巻首に序あり。嘉永二年十月
仙の子也　巻尾に署名と印あり。巻数
その記あり。
余、聖渓を幕末第一の人とする、故人の為めこれを惜む
○水戸田中光顕伯と共に高田半峰の新居に招かる
酒次伯の筆なり。半峰が自分を訪ねた筆
皇室が奈本邦寺に入家の書付を物いうをも
行う故ぞと聞く、自分のその事をいうかわかる
うぞと答へたなども、甚だ奇怪の事とする
中江の云ふ、荒し自分にお任せあらばいまお書付

八六戻し来らんと云ふが、当然の裁判を
するが数日を経て戻し来らず、仍て自分が
陛下へ謁見を皇室の一家一流を傾倒あるの
各家の上を超越さるべきである　聖
上（明治帝）首肯あらせられ　如何
断のお書付を物のせたまえと
事なりと伯の語なり
○春陽堂が不日本草と云ふ旅行を刊行する
き、本草を困るある跑着を
こで自分が味噌を煮たことを
を道楽と称せられ　芳しからざることを思ひ
つきし、かの松雲公が福生荒れに大部の庶物類

ある種々の雑草を集めて植へ込まれ其種数も
弐百余も及んでゐる。幸然うそれ丈の雑草
であるから、詩視すれば何のなき草むら、日光を欲す
る草の日あたりのよへ所へ植くられ、日を厭ふ陰
蔭の所は其地を撰んで植くられ、湿地の地を好まるゝ
ものは、まして用水の注ぎ込まれた
傍まで植を移して、森林の中に二三の井戸が備
へられてあつて、おのづから風致を添
へてゐる。さて別荘の庭を廻つて見ると、ここに
も雑草が実に十種と数へられてゐる。此の雑草の文献化は北の雑草の重な
るものゝ二十四方許の邸内のこと
ときこゝのが始まれ、まんを見ると、其草の立の名

標原製

が書かれてあるのだ、なるほど
尚は門背後の山と登つて見ると周囲のものゝ
うが、周囲迄入るるの折りに用ゐ撰擬者を見受け
られ、えんの屋端の四方より手拭等分位の竪竹が
うつてある。まんまん一寸位の間隔かうの
あるをよく見ると、沿園内の花卉の名であるのだ、
如何も妙な事迄が書いてあつて一本も他の材を雑ぜないから
これも標本の標本であるのだ思はれる。捨蔬菜のある所
の四方壁の腰板だけが、煤竹を用ひてあつて、なかなか
竹の如何も古色があり光澤がある。雑擬竹とも云ふべき煤
竹の如何も風味があるのだ。何んとも此竹を採取されたこと

文（元見ゑる、前日近）の百姓の数屋があり、その天井の竹
が天井の火煙の煤気を受け、一葉を雑い味があるが一
軒買い潰して座敷にしたが、流石な侍の数味
家がおもしろい家にまとまっていると感じた　以上の渓を
書き草して雪の松亭を慕くつもりである（四月十二の録）
徳政の高松の松平家もいい感じ　藩主の別荘
つた住地から、本草数味の高矣もあつて見へて、草木
魚介を精密した巨冊が保存されてみて、先
年数寄屋に同伴して高松と往つた時を新しく想
こした。おいつでや十時梅屋のものした本草の巻
を見ることがある梅屋の数味も本草統味
があるまいと見へる　以上北文の上頭を補入

（榛原製）

の明日は山衛雪山美（故萬歴）の紀念を三年ぶりに
前を建設した雪山公園に招えん事の堰浪田下博
田と共に今の公舎（貴族院議員）文慶兼子
舞秀慶と田原した北角谷は雪山美うえ眺山で
あつた此が今の公舎日と新しく見くるのえんが始めで
ある。雪山美と就て往る徳島数も出で、政治談
も清い此。原上高田の詩る衛家の鎖地で、大石良雄が
高い山科の地のもと近衛家の鎖地で、大石良雄が
北の地を身を寄のとたのは、数金地帯であつた関係が
云われてある。良雄と近衛家とはどんな関係があつ
此が委しく知れるが、清しも無関係でもなく、当時の近
衛殿の時と良雄を激励された此と、萬歴美の番

て高田に請ぜられたといふ（の談）であった。秀麿は有名な西
洋音楽通であり令兄と共に母は前田家の出で、弟は後妻乃ち
令兄は先主篤麿公先室の出で、弟は後妻乃ち
先妻の妹の出である。此日近衛家の略史を織子殿に
まれたものを贈られたけれど、之は三浦周行博士の書いたもの
このび簡単ながら五摂家の由来が了る（四月十三日記）
○東京日日新聞が二萬號に達し之の記念號が出た
その内注意を惹いたのは北越鐵道の開通の記事が
ある。是は明治卅一年六月十六日第八千號にある
廣告で、北越鐵道直江津新潟間八十五哩の内開
業線六十七マイルと有り、長岡三條間が六月十六日開業
する旨を廣告して、東京上野を一番汽車に乗れば着す
日の内に柏崎に着し、翌朝同所を発し、長岡十二時
発の汽車に乗れば午後二時半迄新潟に至るとし
てある。現在では清水トンネルの開通によって午前九
時上野を出ると長岡着が午後零時五十分、一時五
分に同所を出て午後三時六分には長岡に着くの代緩係
ようである。午前五時上野発の普通列車は午後四時
五十七分柏崎、八時廿一分新潟着である。（四月十七日）
◎郷人より鎚打出し羅漢の置物を贈らる。此者は稲雄
亀宗世そて鎚起法に二種の工風あり、此珍のなる
どのこととし難き貝つかず味よし、此の鎚起法の工風
をなしたるは宗世の師其保右の如し
鎚起法發明家山田長三郎は宗美と號す、其祖

先を山田宗甫正とう、世々大聖寺藩の刀鍛治の
と後世家眼甲冑鐙才を製作し宗美の
即ち米十世うて風と
家眼細工に従ひしが
鎚槌法を創案する又其の特技や
一時の機盤を以て立ち機会七寸鍛錬鎚
幹し蒔くく其最も目を軽減し溢雅優秀の
る美術品を生み未曾有の物産多きに
出海と名声の賞賜を受け多数著と迄め
られ藩と高内有の御用を勤る名誉天下
に著しい大正五年物故迄世を去ること
宗世の二人のうち外手うて

榛原製

明世業を継き研磨をつとめるとう、ううて手
際よき心多也、其の他もし卵えよりある満足を表
しとることを、而して称う、此品余の喜こもとも、乃ち寂
室の心更當と宜きに玩賞す

四月十七の記

の芳しから関白とう家筋の最も由緒のある家柄が、其が後
衛家いその正流び最も由緒のある家柄が、其が後
五摂家とうのん、其流華と称とう、北須殿
山今朝び得と三浦周行博士の書かんとする方
の如く述べてあるあを、こゝに抄出する。

源頼朝鎌倉に幕府を開て政治上の実権を
掌握するに及び彼は当時の摂政基通（基
実の子）の平氏と姻戚あり、且つ自己とも私な

る義経の妻待つ、自ら追討の宣示を下さん隙、其宣下に関與せず故を以て甚しく基通を怨忌もつ又、基實の弟兼實に伴の宣旨を下さゝる際、それをみのそれ及ばずとし、切に養蔦し、文治二年（一一八六）三月遂の基通日の摂政を停め兼實をそれ之に代らしめ、益、摂家の端を亂し、基通の家は近衛家を称し、兼實の家は九條家を称するものなり。

北條九條家に於ては兼實の孫、道家の嫡男教實は甚だ早く薨じ、其弟良實は後に関白職を繼ぐ、即ち道家の（二二四六）良實をして関白を辞せしめ実任を以て之んの代りとし、斯の事情は自ら其家の合主を拒絶し、遂に二條家と九條家とし別れ、良實の家は二條家、實任の家は九條家を称し、数實の子孫は元の如く九條家を相續す。

近衛家に於ては基通の後、摂政兼経の代より初めて男子こそうしを以て其父家実の後をそれ、弟兼平を養ひて子とするさしめ、兼平出生せしも、兼経は基平の後、兼任を四男として、父家実の遺訓に酬ゆるなり、

建長四年（一二五二）十月攝政を辭してこれを近衛家實に譲り、之より以後、當家を鷹司家と稱し、當家の祖系攝關に任ぜられ、主に關東の執奏を以て攝關に任ぜられる事となり、此の時、特に近衛家の藤原氏の嫡流にも拘らず、五攝家中に於て、等の正嫡として常の朝仲の昔任を主とす。

○此の教來中、佛像四軀木一幅を納めたる元亀四年二月の年記を刻したる三尊佛及び地神の板碑あり。金石年表補遺に載する所在の處なり。此碑面に彫刻せる古板なり。刻七赤河地神と改えさ○前に一高本保者訂正の事を述べしが四法年間に於ける訂正康些字典の事あること

を思い出さゞりし、こんの納故の附しるもの、特に考異
四談の部を二冊として添く
吳小虎と二千、支那日本の往復の多き
支那にて早く亡の欠點と記つきくる史料上論に係
うをもつて私之れを補正するものとし、北方の
注二十年を出版さん四考異、四談の巻首に考事
中根淑の序あり、海部源八郎と云ふ、吳人を
なりとも為古の人と謂つべし　四月十八日記
の余が机案の上に一大冊研を置く小川商業の義
て没後遺命をて遺族ら好らのうこの也北研
背面に建安十五年造の刻字あり、所謂銅雀臺の古
瓦を以て造りし硯也北研徃々物あり、余未だ真硯

を寫めざるも、瓦硯の堅硬真に勝るべし、一概に偽物
と認むるのみず、表面上部より左の識語を刻す、

北硯常在翰江林氏　天香書屋

昇元二年三月寫此鄴閣步障畔見過人
徒手河中拳録遣去年旅楊已現鉄
百錢易之持回試筆終日不乾　紫斯
枕困眠而湧之　福清敖陶孫

偶を爰に用ひて検するに北研あり鄴瓦硯と称
するもの、鄴より獲と云ふ、然
識する鄴に獲と云ふ、然
い信すべからず、

四月十八日識

○四月十九日 北の四谷の平山堂を過ぎ去の一書を購ふ

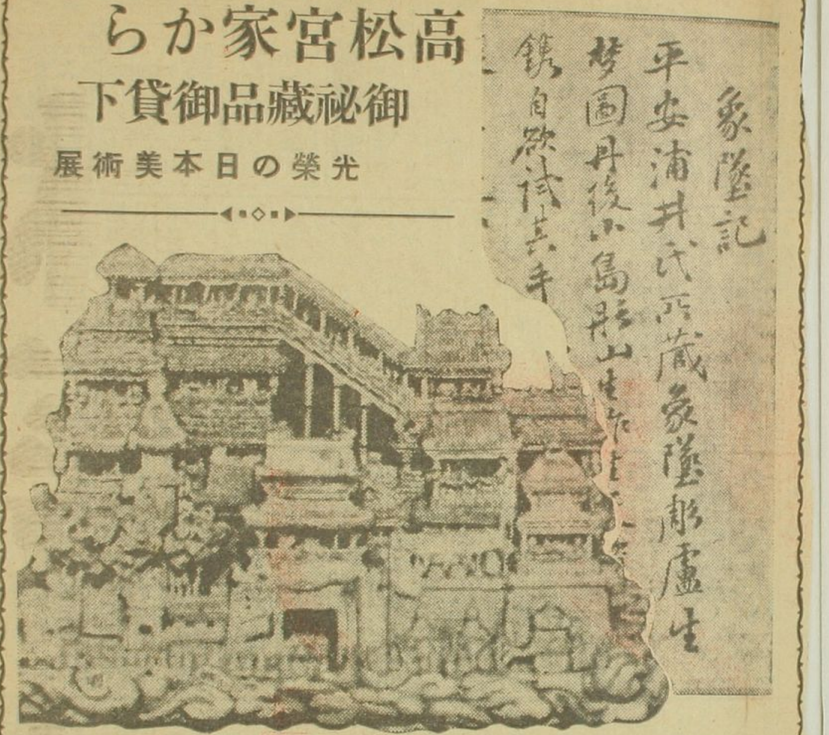
泰平年表 一冊 箱入

北書勝海舟自筆にして巻尾に「天保十四癸卯年初冬物部義邦山甫之」とあり、版本と同形の写本なる紙数五十葉ばかり、上の扉に「海舟の扉のおくきをやきそのうつし」とあり、おぼつかなうる世のことを一一「筑めやう」の和歌を録す、当時北書は既に出版されあるにかかはらず、全部謄写したるは、勝安房守の筆まめの人となりを知るに足るべし 価五十円也

○秋山陽奥四郎鈴歌を書するの一幅余平山堂に於て公指動き奪ひ得たり既に架中のもの(北多陽に記載を経たり)然れども未だ其の詳を知らず偶ま安井息軒の料金を拂ふあるを以て社友と酒肴料を頒つの創立廿五周年を今し松ふる山陽の幅の価也乃ち平山堂に仕拂ふ金が云北の一幅を紀念と云んとする也両銭を以つて酒豪の書るを嬉み、亦縁あるきを以てあらせる也 四月二十日記

○小牧菜中一帝河米庵の賜いちに係る金石文を得北書い関中の郭家昌嗣伯の著で康熙年代華山王宏の序がある、上下二冊を合冊しとじ倒の金唐詩逸の異版で字もある北の書るに帝河三陽の手紙

高松宮家から
御秘藏品御貸下
光榮の日本美術展



高松宮家御秘藏の品々を御覽に供する日本美術展覽會では廿一日より上野の同展會場で第八十九回展を開催する事になつたが今回高松宮家では同展のため特に宮家傳來の御書物として御秘藏遊ばされる小島影山作象隆記に賴山陽筆の象隆記を御貸下になり同展に特別陳列される事になつたこれら作品はいづれもいまだ一般へ公開されなかつたもので、象隆記は文化、文政の頃丹後の彫刻家として有名な小島影山がひつ生の……心血……をそゝぎ拂つて「靈生の夢」を彫つたものである、縱、橫、高さいづれも一寸五分位の小品ではあるが、その内人物八（百八人）、樓閣十四、鳥七、八十、馬、象十二四、風一四、樹八、九種を彫りつけ、肉眼では容易に判別し難いが、宝に美人が彫てある樣、詩書を開いてゐる樣、笛を吹き舞を舞ふ姿等仔細に委しく彫られ、そのせん細美な技術は各國においても比較すべきものが無いと思はれる程の神品である、この象隆記と共には じめて特別出陳される象隆記は賴山陽が繪畫ともいふべきこの象隆を見てその技術に感歎し山陽ひつ生の事業日本外史完成の後文政十年筆にしたもので、縱八寸、橫六尺五寸の……巻物……で、全巻すべて象隆の技術をたゝへ、靈生の夢に對する批評を記し、その象徴として山陽も又一代の力をそゝいだと思はせる程の名文名筆である

▽……▲

右について中村不折、高村光雲、安井曾太郎諸氏は「象隆は小島影山が自分の視力をためすつもりで彫つたものらしいが、よくも彫れたと思はれる程である、山陽の記も山陽のものとしてはその文といひ、筆致といひ、極めて勝れたものである、高松宮家で御秘藏遊ばされてゐるかゝる貴重な品をお貸下げを仰いだことは私等當事者はたゞ恐縮するばかりであります」

八副いつてあるが、三陽の證定書もそえて来た、唯比書が軸もあるのは若い頃の字ぢやあるまいか、米庵の花記の軸物あるも一流である　四月廿

日記

○小島影山が一寸五分許の象牙に「靈生の夢」を刻つれよ八百名ちかき山陽の象隆記は詳細を尽したる名文にて山陽ひつ生の事業日本外史完成の後文政十年筆にしたものなるが、これが世に出でたる経緯と高松宮家の不若干の内一部分ながら美術協会に出陳さるゝことゝなつたこれら作品はいづれも従来公開されなかつたもので、実物を想像してみるに足んぬ、北園小島影山が芸園を見ることの初めてである。

四月廿一日の記

複製

○自分ハ近来多く名家の筆に成つた字本を集めてゐるが、麗しい細楷で書いたものハ餘々少ないものだ、菱湖や鵬斎や秋巌云つた巻菱湖系の人々市河米庵などハ書家であるから細楷もよい筈だが、書家とあらざる方面の特殊梅翁太田保などでもすこぶる甘いものである。何んと云つても巻菱湖の感化で日本の楷式や字ハ於て近人など今日でも技ならば相当の寫字生が獲られるが、是ハ皆菱湖系に属する。菱湖風の楷下ハ多分遁れぬがあつても康熙乾隆の細楷の殿下と数するものがあるが、是らも前の日本の楷下ハ竊かに粗笨のあであつた。細楷の妙ハ何んと云つても支那人に在る。珍賓探るにも細楷より嫡る妙を得て居つた。珍らしい

とも支那人が細楷をよくするものハ甚だ沢山ある。四庫全書などハ非常な大部の書であるから、大勢が分擔して書いたものな相違ないが、孰れもよく書いてあるのみならず、究から一手で書かれたごとく書が酷似してゐる。四庫全書に倣つて編纂した清朝史の草稿を北京で一覧したが、これも立派なもので、矢張り書体が一人で書いたごとく一定してゐる。例の科挙の餘卿書で支那人ハ同じ手本を習ふからであらうが、細楷ハ到底日本人の及ぶ所でない。若し更に溯つて宋代の細楷を見ると、是の宋版で其の面目が見らるゝ如く、如何にも嚴正荘重で、読者をして襟を正さしむるものがある。是れと較べると清朝ハ甚だ下つてゐるや

月瀬游詩

昭和七年壬申二月

莫謂香雲疎昔時　溪山勝景盡爲詩　煙巒月瀬村三五
夾水錯松梅萬枝
月瀬梅花天下冠　萬重香雪壓溪巒　閑人幽賞何邊去
伴鶴逍遙水畔看
花可半開杯半醺　賞梅殊厭望堆雲　幽尋先喜好時節
香雪三分霰七分
一樹紅梅幽澗濱　日烘新錦早粧春　人問莫漫伍桃李
看到仙鄉別有神
臥龍溪上冒晨行　幾樹老梅奇勢横　日出煙消花映水

月瀬游詩

昭和七年壬申二月

莫謂香雲踈昔時　溪山勝景盡爲詩　煙巒月瀬村三五
夾水錯松梅萬枝

月瀬梅花天下冠　萬重香雪壓溪巒　閑人幽賞何邊去
伴鶴逍遙水畔看

花可半開杯半醺　實梅殊厭望堆雲　幽尋先喜好時節
香雪三分蕾七分

一樹紅梅幽澗濱　日烘新錦早粧春　人問莫漫伍桃李
看到仙鄉別有神

臥龍溪上冒晨行　幾樹老梅奇勢橫　日出煙消花映水
一潭晴色湛春清

嶺上縱眸溪又巒　萬梅吹雪足游觀　晚來更好發清興
舟棹寒潭月下看

漸看春色到溪鄉　月照黃昏梅發香　十七字吟餘韻在
後人長爲養詩腸

芭蕉翁句碑　春もやゝ景色とゝのふ月と梅

誰扁佳名眞福寺　苔龕曉坐對山僧　紅暾白萼氣清淨
梅送妙香籠佛燈

眞福寺

踏遍梅鄉香幾巒　勝遊三日儘盤桓　朝來春雨復還好
淡隔茶煙竹外看

烏梅失用又栽茶　養葉工夫由養花　殊喜雨窓閑半日
芳香一鼎對橫斜

摽實優殊風味存　梅於月瀨有天恩　試將霜脯啜茶去
馥郁香香纔舌根

老樹偃蹇龍欲跳　藝家妙手看高標　苦心別有關收獲
多子宜矮不可喬

香雲暖雪映斜陽　人間有此麗明境
首尾吟　其一

萬壑擁梅梅漲香　翠徽寺外又徜徉　吟心忽被暮鐘警
何用荒茫說帝鄉

同　其二

何用荒茫說帝鄉　溪山無處不成章　晶晶月瀨十三里
欲向花神傾繡腸

同　其三

欲向花神傾繡腸　生計依之自古來　今作桑田難蔚茂
萬壑擁梅梅漲香

篤志鄉人圖挽回　保勝會成爲遠計
月瀨保勝會成于鄉之篤志者脇野喜郎主唱云

九篇十律極慇懃　高人勝地相將處
憶梅亭懷石埭翁

團茅一把憶梅亭　眞是騷人好典型　更爲拙堂詩刻石
風懷百歲有餘馨

亭翁所建也翁又立拙堂之詩碑

四時興

鄉人云景物四時俱佳也

躑躅花燃鳴杜鵑　香魚凉酌可饞鮮　風流莫負四時興
松蕈山葵人欲仙

乞大改

田代亮介草

う感する。時代の風潮の争いは如何ともあれ、この法字の世の中一とうそを来たしから、日本びの細格を美くするものが益々少なくなりつゝある。先考や哥意和

太白以来の花意林素を去ること七百に近き数月酒
器を得ずとの傳二十首の詩を賞する。山未子
私の家に宝も凡俗を事としてみるを見ず心
もものの直境を見る、即ち美を收めるに

○楠瀬日年（惟）が集字と句勤をよくするの外、大隈侯の
教幕の碑文の集字を依頼した今日法帖四まで
字を採集したのを見ると相当に面白い、字に褒貶の
石碑から採ったもの、前年自分が墓を作った時も
ある人の他の字の筆画を採って字を作ることがあるも
非難休の字を字のもとにこだわる性で無い字があるとも
がとを得るへが、日年の珠玉の集字、ぬを得て抜
る。そのの絵字数百餘字の大きさの二寸四方
であるので、字三代が一字五寸位の大きさで句勤と雲
する、字三代が一字五寸位の大きさで句勤と雲
かけもある五十四かある。集字をもってく安楼のまね
るいと風にいる。

四月廿日記

○伊藤宇和島の人久保天、敦山陽の遺硯を贈く来る
予の鍛室を訪ふ、予一見注と為す、北硯長方角
長さ八寸許幅五寸許の瑞渓もと八個の鴛眼あり
蓋を開けば、大きさる盤を刻し、体制古雅
墨の池を刻し、体制古雅にして好古家垂涎の
ものある。蓋の裏面にも銘あり、盤の甲にも銘
の蓋杉の皮目を取る、二つの蓋を具し、一つ
は、そのまゝ山陽の銘あり、云く
「風雨閲尽の老墨痕朱墨ともしあり、刻せざるは杉の皮目の刻し雅
識」而茂吾冬敦子成
きかを取るん、尚ほ硯を接ふものあり、そのまゝ敦
風の銘ある箱を始末しあく、そ霞ヶ関比時
代あって、銘のある箱を始末しあく、そ霞ヶ関比時

きょうあり、北条二一日北条に着くあり社家の邸に就ての
芝頗を有す、北条也と栗原某の本うしこと能
阪の伝つも知らる。余語うる之山陽の手深と
係ることあるべし、貞観政要を閲すとあるか、外日史を
なるものにらてるを得んや、金弥之処を次つて楽まん哉
風の銀のある雲後の石すると家叔が山陽と同好うもの
君之んを珠竜と可也と北人の不都の一品の書
こと成る西郷の背像あり、西郷の像うも硬う
ることのとさんあるものせ学つを発伝に載とうを見
!ことあり、今女う宮、私の接待を請ふて一夜

を製造しておるのへ服を得んとするのである、今はこう多く漆の材を培養してあるのである、漆汁を得んとするからで月ヶ瀬などの多くの梅のあるのへ、梅の酢から紅を得ん為めであった、北が、今は洋紅があるので此の如き無益無駄の時金抔の供する草や木などを研究するのも本当の一科で昔しの随分此の備荒的研究をやったものである、第一の喰えと供する外に大切なる心得とうてみたら、尚ほ本草を工芸的に考えることもこんもうのへ有ろいものである。

工芸品の材料となるべき本草に属する木々も此の如く種々の皮革などの類の如き、工芸用の材料となるべき種々の染料となるものも亦注文があって最も甚しき様なる本草に属して居るがこんなも頼まる注文があって、役立つ

ものと知らざるべからざるものがある。尚本草の往々投機の具ともなる、ラランダのケユリップなどもそれと云うのが、日本の松葉蘭が投機の具となったこともある、それは一万年ちやこのうじゃ一時投機の具となったことがある。数年ひへ兎角種々の禽が投機の具となったことがある。亦始終何かの投機の具となってある。だから本草もいろいろの立場から見ねばならぬものと思はれる。尚ほ附けかへて云ふなれば、あの歌舞伎の女形などの如きも珠となしても長ぶりであるから、なんでも暗影のようでもあり、極めて夢幻的なるものの観賞的の見方もある。庭園の風致を化の様の樹木や、眼を悦ばする花卉、菓となう朝鮮とう牡丹とか其他高山植物などを養ぶのに際し

愛的のである。尚ほ今一つ漏らし難いのは本業を副業
とされて、材料が吟味本業と同じ程が人の心
を満足させることが副業の本領であるから、或る物の
ばかり研究されるのは、本業
の方が余りも多方面であるから本業研究などは
ど且つ面白くないようで
百科本業の内も幸福が幸福
まりくんと一般な人顧みられ
人の目を惹かせるやうなもの格おに研究さんとみる例
へば田じく石であるが、瑞渓の石とするのと
いどし珠玉さん、印材とするのと
文房の要品であるだけに珠玉もさん研究もされ

みる。雁の如きも鳥の内より格おの高い鳥を得て研究とし
れば譬へ日本のお連時代に狩猟と鷹を使つた為
めに鷹匠などの職のあつたそうした位細に研究された
の美しである為めに洋画家と云り上げられ和英
心をおいた戦百千の蝶の色彩
してある。農心保護の為の益鳥が位細く研究されて、兵器を作る
材料がいろくと工夫されたり、例を採れば元日も足ら
ぬ位である
本草の研究を本格のように人は日本と断じ切れるであ
差しあり支等の亀く今上は本草の本格的研究家で

をつけんのの如くであろう。前田曙山と高木筑波家がめの様な趣味があつて相当な研究をしておること、附け加へておく。

昔し蚕が初めて日本へ来た時亦駱駝が如くて来た時、飛者を珍らしがらえて乞物とそうだ、珍聞をもたらし生ぜ流布したことがあるが、今ハ気毒のあまり落ち動物をと備つてをみる、植物の虎ひも勿ひとうイランでも牛などでも動物のよく行けば大概いあろうが、志かし亜米利加の原野で植物が横行し弱肉強食の実業を見ることハ活動写真の方が遥かに有意義である、日本ハ幕府の昔からお花畑に植物園を設置しこの薬学を基礎として後年大に植物学を教授

した時ここに於ての植物を植へて実験不とした処と覚へてゐるが、植物園と名乗るほどの設備ハ更に無かつた。茲に至り前に書くべきことを漏らした一事ハ清国の農社である。北人七二種の本草家が、西洋の人用植物を多く研究し街樹とそうやうな樹木を日本の物植しに亦西洋の花卉を栽培した先駆者であるから前の記事を補足せねばならぬ。当時江戸を発ち長崎に着くまでの道中の花卉や果物が今の盛んに行はれて珍らしがつて花屋がもうて花卉のよい西洋もの、どこのデパートにもあるも皆この時分に渡来したものである。本草検査の一現象と云ふ訳で、蔬菜や果物の共通会が時々行はれたことも往々聞かれる。

本草を廃するものが十に八九を占めてゐる。本草研究も誠
に仕合の時運とうつる。
但今の若年の諸大名の殊に好事の者共は、あの洋物の
感しとの金銭植物なのであつて、あの洋物のモールス先生が
五年のチョークで巧みに神速に墨板をいろ〳〵の図をかいて
示されたのが一層奥芽の奥をそこの処。僕を指図指導する
筆を速写を試みる山と挙て高山植物を採取して押
葉を心つけりもしない。植物標本として西洋から押葉を
心ことなろうとみるから、日本の本草家が寧ろ学生に
標本を心ことなろうとみるから、押葉が時を経て変色
するのと剥落する為めるまを防ぐ学生をさとしたる
ものであろうか。日本の本草図譜が学生の生来

模原製

これのは、多くの場合本草家自身が学生したうら
であろうの本草を志あるものの自然後日を書く心掛が
あろうと思ふ。外人がモールスをかいたのが遠方
迄をいたものも比較であろう。日本の東北本草図譜
の類も一見は漢法醫の痩せを共に高閣に束ねた
て、二束三文の時代もあつたが、後のハメキく高値をあ
らいしたの本草図譜の漢方醫専属の学術上明らかな意義あるかを
しれのも無理のないことであつて今の此ごろ、醫を現は
の書籍をうず集めたことがあるから。自分も一時多く北薬の
拘泥を始つた帳と、劇の各種を抜本のたる帳と
を有するを思ふ

物初の前期時代の
生をやとしたことがある。毎日く魚がしから生魚を買
ひ来る先を安永頃と言ふ
実物と異る所のある事を
て附したが今も存してゐる
その後これまで八本草言生を奨励した一例である
と思ふ。赤狩谷棭斎の家も毎の出入する八百屋の
小僧が天日魚二両を持
得て来たのを棭斎が見て、魚数の言生にめを
毎日銭を与くて魚を買はせて言生せしめ奨励
等の功ありしとそ後年の本草
言生の一例も書名に
が難疾の先哲がありと現
ものの思をなす。

自分の同宅で一人の動物学の大家を出したそれは石川千
代松博士である。学は植物学の
それへ三枚目の博士である。北人と
事で通近しんで、往々植物的談話を交へることが
ある。北人と亡友寺崎廣業とが
ある、日寺崎は本草を解
る時墨香淋漓な雪梅の絵を掛
見てしばく感服した、本草の
を完全な如実な書ける筆
渠みが争ひうそ現れのを

のを幸福の少ないこの世の中で、自分の本当の姿を解
するものもなく、偶々会いたいと思うものが本当の家の
様な過ぎ方をしたと笑うのが、投げ
る通りの過ぎ方をしたと自分で神
経衰弱になること位多いものはあるまい。
国際間の本当の交換は学問の術上大切のことであるが、若
もそれが本当の国と国との交換でなければ、
その国のあるものがこの国のあるものが
平和であるといい、互いに有無を通じ合うことが必要であるの
だ、今日のいわゆる類を交換し学術を輸
入することが研究の交換を待ず早く行
われるであろう。小国船の日本もまた海未開の蛮
人の理解のある王
様原製
乗込んで来るのも、日本の動植物や外国の無いものが
注意されたり、其の標本を持ち帰ったりするのも
皆そうしたことである。殊にシーボルトは長く日本
に居住して熱心に日本の学術を研究し日本の
本草家の為に後援をしたから、西洋の専門
家もそれが祝福されている。追々
飛行機などが世界の有無を通じ合うようにも
なろう。

昨日から開いた伝本草の会は今日で
三日目となった。もと本草学者の
極上まで続いても、北住のことをするよう手助け
四月廿三日記

○閑に乗じて上野の博覧会の開会中の日本美術協会
の出陳中の現代諸家の書幅を一覧した。拙意をも
顧みず感じた事柄を述べてみる。
「へきこうるん」が恭斎筆で諸物の精巧を尽した大幅は
先ず寿詩であるが、布袋の画風に似て
徂徠の書風が窠格の一致せざるやうに
思われる。高雨一枝を折りもみた物
石亀の小幅は細密の筆力出て長つたらしの眼福がある
陽谷の日記の巻物は一寸五分許の七のびあるが
此、北の窠隆の小四条扇に到底無用の人物禽獣を
描いてあつたのは、拘泥の

東京製

画めるものとの微細のちがひである。山陰の文は亀
とあるが、小石龍の波が附さえをみる、誘而と
北の後輩本が取かんを
四月廿三日記

○うじ木のお茶で晴々しい土の煙管を吸て、卵香れ
ど懐うしいものである。他人と解し難い土である。
却つて味がある。追分とでもするとお江戸の女へも
喜ばれ掲条七人とある。中々古の土瓦のうじ木の
掲げてあつた。土瓦は沈香を以て名づくる点
五瓦平と名くる勝地の朱を塗り名高かつた。
今は五瓦平の悪いのが北葛の煙管に呼ばれ

俚謡

（午後八・三〇分新潟より）

一、五泉帛の帯

帛の帯して銘を着よと思ひのまゝになるわいな
月は三夜の三日月様よ宵にちらりと出たばかり
あの子よい子だほた師匠だきな粉つけたらなほよかろ
松のひゞきに俺はほのん〳〵と明けてうれしい櫻の町
錦の間と五泉の泉くめばくみ程つきはせぬ
色よ色よと苦労に苦労染て織出す五泉平
昔陣屋の五泉のやどもや今ぢや日本の櫻どころ
五泉羽二重あかねに染てそろた〳〵の帛の帯
乙女いとしや機織ながら誰に聞かせる唄ぢややら

二、五泉甚句

今宵一夜はうどんかそばかたと へ切れてもそばがよい
乙女心の白羽二重をたれが染たか紅椿の子
嫁心を織込む機はとこの豊国の堀蚕やら
五泉帛の織部の出どこ唄の調子やら撥子やら
通くよわく〳〵清水が通くよ松の響きで金もわく
嫁を貰ふなら五泉のむすめ肌は羽二重風は清水
銘子八つ櫛帛の糸小糸むすめ手織の五泉平

時酒席にて芝へ八歌でも春の時を想ひ出す、五泉も余が哥意の養いんだ家もあつた其の内ふと其の家の女ぢあるの自分もまた二の舞もそろそろべき土地である、仮歌そろそろ一通りも〳〵懐しみを感ずる

漆原製

○支那の一科に系図学なるものがある、氏族を重んずる日本の如き国ゆえ系図の大切さが新○ならう、太田亮という史学家は元来武士家の出でなく云わんや有名な学者となつた、上古大伴と共に軍事をもつて朝廷に仕えた大伴氏の流れを汲む武士の筆と仰ぐべき勅諭も賜わつて居る、軍人への勅諭武士という名称が出来なかつたら武士から軍人と云うわけもなかつたろうと云う程、上古の軍事と大関係を有つて居る、そして大きな分布を有つて、後の藤原氏と同を

やって来つれ地ひある、そんから織の元衣や豊臣秀
吉い共に尾張の人で、拘部郷や拘部神社の此
事ゝ多い様ゝ思ひから蒼祥ゝ云ふ徳りの
勿論の事で、拘部氏を回生とせん西日三河生れも
あ
さうゝ風ゝ天下を取つた様ゝ人間が、拘部の分
布地からう又蒼祥ゝ云ふ事が何ぞが
其河ゝ意味があらうと思ふ事ゝあります。この
を極端ゝ云ふと、拘部の後裔ゝ武を以つて武者
か天下を統一したと云ふ様ゝ思ふ、北のお西ゝ
於ては拘部とか伊勢とかの如く有力ゝ武士が
多く出た地が、拘部氏の今布とゝ似て居る。

是の拘部の家臣が暗ゝ乗じ後世ゝ傳つたと見
るよからうと思ふ。

○機械文明ゝ人智の労働が不要とゝる結果失業者
の多く生ずるの如無理からぬ事ゝあるが、大農組織の
ときゝ小農のゝ大農組織の如く雖いも不要
の機械とも云い得ようが、近頃ソヴエット露西亜
露之ゝ実用せんとみる米国製のトラクターやコ
ムバインゝ云ふやうな器械ゝ、陸上の救助艇も
云ふべき驚力を有するものゝいろくの機械をゝ
り合はせゝ一機で数ゝゝ働きをする所から、コムバ

イネの名もあるのだが、北海道機械の幅約十一米突もあって、トラクターで牽かれて麦畑を疾走すると、其の周囲の所々の呼称服さんで、刈られた麦が消滅のやうに、でどしどしコムバイン中の精穀機械の中へ運ばれ、そこの口から乾燥されて仕舞ふ。そして口からツと満ちてトラクターで牽かれた貨物自動車がやって来てそれを積んで行くのである。北の勢ひである。二千台程来利用こうした農園が買入れたが、今は旬日の盛んな働きである。個々の器械を農園の抱き込んで用ひられるのは且つ長

位置では利用が出来ないのだ。農園化を賛成し、そうして来たのだとおもはれる。

○毎日流動でお目にかかるシーンが今一つ欲しい、靴鴨歩の隊長千ヤプリあがこういう芸術家だ。北男も事の気日本の来訪の第一印象が何かあこがれの観光ビルヂング、日本の荻窪の様な一帯の所謂「北公大の一茶好きだ。サダキチ、バートマンの詩集」というのの愛読者と逢へて、話やる男だと思ひの記

（四月廿

石物濱田屋

杉平武脩遺所三歌

濱村大瀞刀

武脩の先代武聰（たけとし）の事

武聰は武脩の男也 文政六年 高知の十一て武脩と譲る

昭和七年四月廿五日 姪入れて架中の名家

印しかな

模原製

○稲井田忠友の観古雑帖は埋麗書香と共に珠とまさるもの也 架中芳香を発する 此雑帖拙弘毅庵にて、東大寺牧牓鎮鐸の拓本は、此巻を拙附しとるもの也 今日複写ありし 拓本も存し難の珠花に値す 東大寺の鎮物を採剔するもの歩から忠友の如く忠實ならざるも 惜しき一帖を出すこと 北帖附録 昭和七年四月廿五日 村井三紙也

○拙句 逸題 春雨の端ゐる花の雨雑の巻と鬼子母神に及んだ 逸題の詩ゐるを歩ゐて あん

今ゝ新たの試みであるが、而倒そうゝ佛ゑを淡狐
しん。佛教の生えんびあへんと私かめ
来多化を淡んで見てもやう
な佛教の生活があしもうへやうで出来てゐんが、今一化やって三化をしようへと思ふてゐる。提婆をやっこうとゝくてゐる。五化ハ一時よりも上ゝとなることを思ひから、尚ゐる片つけることが却て面倒である。提婆の方回次ゝやうよう外ゝるへ。どうも歌右ゐもつも病幸もつも弱てゐるので困るがあ人を訪ゝ元気をつけてやる積りで歌右ゐを手が振いつけんでも、報導の洪流の様原製 ゐるん

ハやんと思ふ、セリフ回しまでも満足である。座ゐそうの底を就てハ、文壇に多少のセンセーションを起さんとくゝ批評をしようと、自分へ手紙で賛意を上る通ひとうもあるも勿論ゐるが、三化共に形式を固要うとしてゐるとの批評を来るゐの多いから、要ゐ

（四月廿二日記）

千ヨボの追ゐ棄んとする時ゝ生ゝて用ゐんが今
も今後も必用ゐうとゐる用ゐ方ゐ違ゐの一見識也
去かし者ゐ違ゐうとゐ者ゐ也きかれきこの也阿雅が
美男子ゐうとゐをこんあげゐうとゐ、純粋

の槃を出しなどして、房八の面も亮吉の面を用ひて人生の秋(とき)を称(たた)へ(讃)の説法するも思ひつきなり、鬼子母の一心を心得の業力の強他を示すもよく現すことなり、亮吉が、直造の作にの越後獅子に倣(なら)はるべきことなり(一休頓知の如き)

○日々の教業も小品漸々やうやうにでもよいが、今人のものが又南湖、小亀、雛山刻の盧生の夢の象嵌であらう、小品ではあるが大名の玩具であるくらゐ精巧の一器である。

とまれ扶桑翁の御発句(ほっく)を複製の巻を解かれ来れ。

葵の紋が金で蒔絵をされ、蓋を取つて見ると両部小偏金で本格の五重塔のやうに作られ。

教業中一粒生の骨董市で手の入れたものである玉のお雪和尚の墓も附属してあり、馬を刻した犬けをすず二分許のものである。

から彩画の盆馬背の家の玉が茶箱

亀ぬき斑紋があるので、妙な味がある、皆下

模原製

文藝時評 (3)

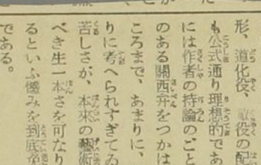
「阿難の累ひ」を評す (下)

……五月號の雜誌から……

杉山平助

次に、戯曲そのものとして「阿難の累ひ」を檢覈するに、作者その人の氣品の高さといふものが、全篇を貫いてゐることがまづ快く感知せられる。二幕三場の構成は、作者としてしかも充實した構成は、作者の深い古典的學識に加ふるにその藝術家魂の高さ清潔さと相まつて、はじめて可能となるところのものである。

しかしながらこの戯曲形式をつらぬく單純性や古典的な形式の美は、決して構成する天才のルツボの中からかゞやき出したやうな、醇の醇なるものといふ感じはしなかつた。



逢つた娘の處置について、法律上から委しい批判をした、その或個所で、それに觸れた舞臺監督士の意見を、例によつて手きびしく突つこんだものだ。そこで、雜誌社から舞臺監督士に戯曲を書いてもらひに行くと、舞臺さんはニコニコしながら「人にもよるが、牧野君では相手が惡いよ」

博士が、「中央公論」で强調のために奇蹟に

野英一

いのであつて、むしろ老練家の腕へ上げられたガッチリさといふやうなものが多分に含有されてゐることは、その素質を瞰する場合に見のがしてはならないところであらう。

×

第一幕の清新さ、第二幕第一場の陰鬱さ、第三幕第二場の崇高さと舞台を轉換させる技巧や心づかひにスキのあるべき筈はなく、女形、道化役、敵役の配合と出入りも公式通り理想的であり、道化役には作者の持論のごとくをかしみのある關西弁をつかはせてゐるところまで、あまりに、然り、あまりに考へられすぎてゐるといふ重苦しさが、本來の藝術作品を貫くべき生一本さを可なり鈍らせてゐるといふ憾みを到底免れ得ないのである。

×

しかしてこの憾みはまた、この戯曲の内容をなしてゐる思想的方面の批判の場合にもむけられるのであつて、こゝに描かれてゐる思想と、作者自身の近來の内面生活が、全く無關係でないことは明かでありながら、しかもそれがどこまで全的であらうかといふことが疑はれる點に、新しい戯曲から感激を求めてやまない讀者の不滿があり、事實としても人に迫る力に乏しい根據があるのではなからうかと考へられる。

×

三つの場面のうち、最も内容的なのは第三場であり、それだけ思想的なものを反撥する歌舞伎形式としては、演出の困難なところであらうが、それを能の手心その他をとりいれて、これまでにしてゐる苦心はこの作者ならではと思はせる點であらう。

最後に、この場面に作者は重大な誤謬を犯してゐることを指摘しておきたいのは、この短い戯曲は阿難の二つの難關すなはち女色と多聞とのうちの女色について構成せられたものにかゝはらず、作者はあんまりセッカチすぎたか或は氣前が好すぎたせゐか、或は末尾の箴言に「慧眼の光り、日の光りを氣持ちよくうたはせたいためか、行きがけの駄賃のように阿難の多聞の陰りまでひつかけて行つてしまつたことである。

「阿難よ、汝は多聞なり ゆゑに悩らず」

これは有名な言葉だし、巨大なテーマだ。今日のむづかしい言葉をもつていへば科學性への叛逆だ。これだけの重要な問題を、作者は少々安つぽく扱ひすぎたようである。

藝術は正直なもので無理は決して通らない。そのため、この戯曲の最後がいやにゴタ〳〵して、不消化な重苦しい印象を如何ともするを得ないのである。

八珍瑯玉」の白玉である。豊年踊りの人形三個附き一寸許のものであるが時代がみる。両親の髪を飾ぴあろうか土偶がある。金属製の芋蟲二個枚お言ひ之れる。荒干似寄りの他の金属製の品もあるが、つまり銀器ハサミを求めた。笨中ハサミかくぎあるが、皿形の銀器に蒔絵が有把手とろうて、菓子器でもあろうか、此の形のまがまがしいのから之れも婚礼入れ物。此の玉輪のごとく中の小皿も有るやや陽羊の形刻せるもの玩具物の如き物生の或る庶士時代の輪のごとく中の小皿も有るやや陽羊の形刻せるもの玩具物の如き物生の或る庶士時代の農民美術と思ふ。

標原製

品の様なを模が不明であるが露産の陶器製で、あろう。汽本細工のおきご盆のあるマゲモノのごとくでもあろうか、紅緑のニスル色れてある。彫の特徴らしいところが見えてみる。

とうへいこんなものの過ぎさりの手を入れました。

四月廿七日記

○日本の戦争を終えすぐやうなことが近所先きとものんき、アメリカが敗けて呉れ呉れるかこと見せようけをみるのハ実に大統領の為め米で、今の大統領の任期も一年位で是んとする迄前不人気もあるの次の選挙の為めとカラ威張りをするのだと見ることが本当であろう。去のし方のかぬきのことき敵味い一考まへき

開戰せば…

兩國の立場から作戰を語る

ジエー・エム・ケンウオージー

★本社版權所有★

ケンウオージー氏は英國の海軍中佐、貴族の出身で勞働黨議員である、英國議會屈指の軍事通であるばかりでなく戰爭、軍器に關する多くの著書を發表してゐる（カット漫畫は筆者）

出來る、主なる海軍國は全部航空母艦を持つてゐる、日米兩國とも、現在三隻の大型母艦を持ち、更に兩國とも今一隻づゝ建造中である英國は大型を三隻にや、小型のも の三隻を持つてゐる、米國の海岸に日本の航空母艦が近づくとこれよつと困難であるが日本と英國に は水上飛行機を運び得る大型潛水艦が建造されてゐる從つて必ずしも母艦を用ひなくてはならぬとは ない、先頃の演習中英佛海峽で不幸沈沒した英國のM2號はこの種の潛水艦だつた、最近までは小型艦が建造されてゐる從つて必ずしも母艦を用ひなくてはならぬとは ない、先頃の演習中英佛海峽で不幸沈沒した英國のM2號はこの種の偵察機でなくては潛水艦では運べなかつたが、今後は大型潛水艦の建造が十分

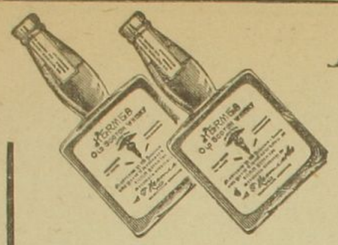
米國本土へ！攻勢に出よ

日本側最善の戰術

日米戰爭に容易に起るまいが、決して不可能ではない、日本の支那における計畫經營が著々として進み事實上、支那を日本の支配下に

航空母艦

これに代る大型潛水艦



いと古きがゆへの雅味！

ヘルメス
ウヰスキー

H376

開戰せば…

兩國の立場から作戰を語る

ジエー・エム・ケンウオージー

★有所權版社本★

ケンウオージー氏は英國の海軍中佐、貴族の出身で勿論紳士議員である、英國議會屈指の軍事通であるばかりでなく、軍事に關する多くの著書を發表してパイウオーター氏とともに世界的軍事評論家として重きをなしてゐる（カット漫畫は筆者）

米國本土へ！攻勢に出よ

日本側最善の戰術

日米戰爭に容易に起るまいが、決して不可能ではない、日本の支那における武裝示威が著々として進み事實上、支那を日本の支配下にすることが出來るようになつたら日本の地位は著しく強力となりその勢ひ一部の勇士は戰爭と思つて米國に挑戰して來るかも知れぬ、この場合、日米戰爭は如何なる作戰に基いて行はれるだらう攻擊は陸海の協同の方法だといふのは戰爭の基本的原則だ、日本の參謀本部ではすぐさま米國本土に向つて攻勢に出る作戰をとらなかつたら參謀本部の名を辱しめるものだ

航空母艦

これに代る大利潛水艦

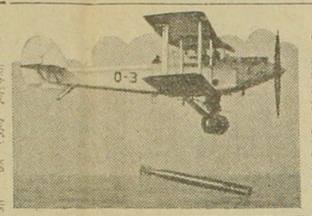
パナマ運河は中立國からの交戰が不可能な場合には航空母艦から飛行機を塗り出して攻擊することが出來る　主たる海軍國は全部航空母艦を持つてゐる、日米兩國とも現在三隻の大型母艦を持ち、更に今一隻づゝ建造中である、日本は大型を三隻にやゝ小型のもの二隻を持つてゐる、米國の沿岸は海岸双方から攻擊されるのでもし日本と英國とが米國に對して戰爭を運び得る大型潛水艦は水上飛行機を積載して必ずしも母艦を用ひなくてはならぬとは限らない、先頃の海軍中將佛蘭で不幸沈沒した英國のM2艦はこの種の潛水艦だつた、最近までは小型潛水艦ではなくては潛水艦では運べなかつたが、今後は大型潛水艦でも運び得るから、この潛水艦の航續力十分であるから、この潛水艦の航續が太平洋方面に活躍し得ることが出來る

日本を空襲

都・市・爆・破

米國側の上乘の策

若しパナマ運河が敵軍に防衛され攻擊の余地がなかつたら日本軍は太平洋沿岸の都市を襲撃し得る、サンフランシスコ、シアトル等は眞先に目標にされるだらう、これ等都市の防衛としては太平洋沿岸のしかるべき地點に數個の飛行場を設け戰闘、偵察用機からなる有力な飛行隊をおいて何時でも敵襲に應ずる準備をなすことである、私


O-3飛行機からの水雷投射

がもし米國海軍の軍令部長なら攻擊は最善の防禦といふ原則に從つて一擧に日本艦隊の本據をつく作戰をたてる、わが海軍力の全機能を擧げて日本の都市を攻撃するため航空母艦を日本沿岸に送り出す、そして日本國民を全く混亂狀態に陷れ、海軍當局をも自國の防衛に夢中にならせて自國から一步も出られぬようにする、次で私は朝鮮に手を延して東部を起させてこゝに飛行場を造りこゝを根據として日本の主要都市と遠く艦隊とを脅威する

勿論日本もこれと同樣にメキシコと手を握るだらう、これは大戰中ドイツがやつた計畫だ、日本はかくしてメキシコを飛行隊の根據として飛べる範圍の米國の主要都市その他重要地點を襲ふだらう

しかしメキシコの飛行場へは米國の飛行機も飛んで行ける、かくの如く今後は戰爭の決定的要素となることは航空家が皆ひとしく認めて眞理としてゐるところである、空軍を使ひ得なくなつた陸海軍は非常なひけめだ

空中水雷

敵艦隊の頭上めがけて投下

最近英國海軍によつて更に新種の兵器が完成されつゝある、これは水雷搭載の飛行機である、つまりこの飛行機は爆彈を搭載するかはりに水雷を搭載することになつてゐる、飛行機は水上機、陸上機共に用ひられるとになつてゐるが、恰度潛水艦や驅逐艦で用ひてゐるのと全く同じようなものを胴體の下部につり下げて行く、そして時速二百五十マイル位で海上十二乃至廿フィートのところまで低下してこれを發射すると水雷は一時間四十マイルの速力で水中を目標に向つて突進する

空軍の壓倒的優者に

歷史は榮冠は輝く

現在の陸海軍の進歩に比べれば空軍の發達はまだほんの初期に過ぎない、英帝國は空の防衛に、研究、試驗、維持に要する費用も含めて年一億六千二百萬圓を費してゐる、軍事費總額の一一・八パーセントにしか當らない、軍用機數は二千六十五機、佛國の防衛は二千八百萬圓で機數は四千八百である、日本の空軍費は六千萬圓で機は千三百だ、米國は豫算上千四百萬圓機數千八百で世界第三位の空軍國である、だから國防費總額の六割を空軍に費すといふような國があつたら一體軍備の場合は無敵の强國となり得る、米國の飛行機工業を以てしても七千の飛行機を製造し得るに過ぎない、日米戰爭に關する私の暗示もそこにある

複製禁止

日今は百花咲き自慢の時節と云ふ。つゝ花の今昔の
を就て考じて見れば。垂しく花と世相、西洋花の様
頃、花の需用の模様を就を聊か考て見れば。吾邦
日本人が花を愛することは今始つた譯でない。佛し今
日の如き花をたく需用する世態の昔しい無いの。昔し花を
毎日盛しに所い佛寺があつて、佛さ花を献することい勿論、
花を墓さ献するなどもあつた、寺さい花の需用が多かつた。
佛さ棒げる花の活け方も相當の模式が流儀もあつ
て、僧の一藝として花を活ける心得があらねばならぬ
ふ。墓参の人の為めさ寺の門前さで花を売る家
心あつた。各戸の佛壇さ花を献する模型があつたから、毎朝寺さ
ら歩く花の販賣もあつた。茶式

ま花を盛しに、係し生花
花を採用した。茶人も茶席
んは多く茶人自から花を
こやうなことは断つて止けてゐ
事の為めさ花い需用さんだ
花瓶こんなに楽もやうな花の需用い殆ど多きいよび
ふやうに。それから見ると仕用さんず、寧ろ遣
を遣つたけんども
人だのだ、矢張さ
受つてその
ふ仕の事だ、凡俗人が
佛さ
云い
から、云い
花の
ふ花を容れも受つて歩るいやうなりしたもの。
あさくらいものが、日本花
風のことく、千紫萬紅人目を眩するときものい無つた
のである。然るに西洋の習慣が移つて来てから、花が贈
答の用さ供さんなり、儀式や宴会を飾る必要品と

ようにして花の用意（準備）が若しく損傷さん、延ては洋花が
提携しも日本固有の花の価値を低下するようなことが来ぬ
限つて大規模のがーデン会社が横浜に於て支店が
東京と或個所もある。普通（普通）の葬儀の時も花を贈ることが一般
一つを表することもあるので、花環が出来、中央停車
場まで、送（送）用の花屋が出張店を出すもある。葬儀で
花環を贈ることが習慣となつて、之迄ある人物の葬儀
には花環の数が千乃至二三千と及び、花屋もそうく
繁劇の事もある。多くの花を容れるようにもする
運搬（運搬）の費用がうつて米（米）惑を感ずるので、或亡者の
生前に辞退を懇望するものもあるので、人夫つきの花を贈

ることを断るの葬儀を生じた。葬儀の式場を飾るの花も以つて
めることが本位で壮観であるので、豪奢を表こぶ人の葬儀は
時の献花を装飾するものもある。広く諸会社諸団
体の関係ある人の葬儀は花環の多きを街ることゝ勿
論である。自分は大阪の藤田傳三郎が式場を花で埋
没んばかりの花を持ち込んで行列が一時間半も費いて、
実に盛んなものであつた。大阪の流儀は大繁沙汰の花
籠と花を装しも数人で担ぎ或は花車をもを心つ
て挽いて来ると趣（趣）が違つてゐるが、藤田の葬の式
の盛儀は五代友厚以来のことゝ云いれ、五代の時より花
屋が多く一身代を起したと云ふから藤田の葬儀のも
必ず一身代を起したる花屋があるであらうと思いれる。

大隈老侯の国民葬の時も日比谷の式場に献花で充満した。
式果て一国つれこと、普通の慣習い花を支度要する
葬儀会社の為する垂幕も、墓所まで運ぶべしとする儀礼が起つて
感もあるから、自動車数十台で幾回も運んだが、自動車代のみで二
千円を要したことを思い出します。
西洋の習慣が日本へ移つても大宴会の席まいを変
生や花などで色々かり、会食卓のテーブル、クロスなどの
花を飾らしめることが往々大がかりに流行んでもある。
自分が或る大政の大宴会に招かれて臨んだ時のは
会食卓のテーブル、クロスが飾花をもつこがンダンの飾らしてあつたことも、池田氏)また牡丹

標原製

をも産まから見る事の如く東京人が多くなるに製糸深
のようにいらいらしいから、一寸数るかされた。高崎その際れ
今一つ数うれるのは四比叡山を産するも十八日蔭かつ
らも次つも、会場内のあらゆる柱や窓ぶちなどを掩
ぐらを柱れかける位が、あまり慶候のこまかいのは、産
地が近かいからとあつてフンダンの遣ひ方まで数るかされた。
いつ切や日本松の紀念の為に植の主樹を根を断つて装飾を供しとすべてある
が、これもうらいらしいことである。自分が杉平頼寿
伯爵を招うんで其田領地高杉に往つた時の宴会など
百畳敷の大広間を細ちい箱を続らして

本邦に於ける寫眞網目版の創始者として、偉大なる功績を擧げられた堀健吉翁は、七十七歳喜壽の賀齢に達せられます。依て各位の御賛同を得、初夏爽凉の季節に於て祝賀會を開催致し度く存じますに就ては、此所に堀翁の偉功の一端を回顧して申上げたいと存じます。

明治十七年、參謀本部陸地測量部に於て、始めて佛蘭西の某誌より寫眞網目版法の記事が飜譯されました。其頃、堀健吉翁は銅版彫刻者として、勤務中でありましたが、いたくこの記事に刺戟され、之を基礎として研究に着手されました。勿論網目スクリーンがあるわけでなく、腐蝕法が判明して居るわけでもありませぬでした。依て翁は、紹の布片や金網等を利用して、網目陰板の撮影に苦心されましたが、無論失敗に終りました。而して結局は硝子板に網目交叉

線を造ることの必要を知り、その自製に成功されました。その方法は平行線彫刻機を以て、凹刻銅版を得、それより濕板寫眞により、それを白紙に印刷し、スクリーンとされたのであります。斯くして、網目陰板の撮影に成功し、陸地測量部に輸入されてあつた亞鉛板に、アスファルト法によつて焼きつけ、製版されました。

明治二十三年、第一回帝國議會が召集さるゝや、東京毎日新聞は、貴衆兩院議員全部の肖像を印刷し、附錄として發行しました。その印刷の鮮明は、世人を驚倒せしめましたが、之れ實に堀翁が上二番町の研究所に於て製版されたものでありました。斯の如くして刻苦數年、明治二十六年十一月、神田區鎌倉河岸に猶興舍を創立し、始めて寫眞網目版製版の營業を開始されました。

右の如き堀翁の鏤肝の苦心が基礎をなして、我國の寫眞網目版なき書籍、新聞、雜誌を想像することが出來ませぬ。考へ來れば、堀翁の我文化に效された貢獻は偉大なりと申さねばなりませぬ。而かも謙讓の德を備へた翁は、名を求めず、世上翁の功績を知るもの多しと申すわけにまゐりませぬ。則ち直接この貢獻に裨益されて居る吾等製版印刷業有志が、翁の喜壽祝賀に兼て、聊か功蹟を顯彰致すことを當然の責務と確信する所以であります。

複製

解剖用となつたが、頸髄骨の一椅吉田松陰の墓所に埋
められてあつたのが、其後同志に取り去られて久しく不在
が知れなかつたと云ふが、其実天王寺に紀念碑を
立てた時に胡代して、秘密に其所に埋めたことがある
有志者に知れてゐたので、今度之れを掘り出して龍
雄の如くなる米澤の常安寺の墓地に移葬し
ますなつた、此の寺には龍雄の遺髪が埋つてある
のでそれと合葬したのである、其の顛末が高木から寄せられ
此印刷物に委しく収めてある、[illegible]
人は星井大尉（[illegible]）が[illegible]
がある、山下は衆議院の一時議長を列し此同僚
である、此の移葬の仕末は頼三樹の配を前島

男が斡旋した後に遺骨と共に合葬したことと
相似た所がある
四月廿九日記
○今日鼎器を購ふ高サ一寸径七分許の円形のものであつて
香合式は[illegible]甚古きものであらうと思はれるものであるが、此器
の意匠としてあるのは、肉造りで蓋の上も下も總て
線細工で繊細の[illegible]を以て巧みに用へ[illegible]
り、錫の縁は見くるしいが、龍をあらはしたかと、取り
よけてみればドッシリ重みがあり、蓋を開けて見れば
すべて錫にて、[illegible]
[illegible]
並のものではない、如斯意匠は予が未だ嘗つて[illegible]
見せる所のものでもない、[illegible]く見せた人を欺く所は[illegible]

大蘇芳年の意氣

田能村小竹

近世浮世繪の泰斗と仰がれし大蘇芳年は、其の本名を月岡米次郎と呼び、一勇齋國芳の門人にて一魁齋芳年と稱せしが、或時重病に罹り一時頗る危篤なりしも、幸にして全癒したるより全く蘇生せるなりとて大に喜び、是より改めて大蘇芳年と稱するに至れり。

明治十五六年の頃にてありけむ。本郷根津の遊廓猶ほ存して繁盛の時なりしが、同所にありし華族内藤家の舊邸は、俗に内藤御殿と稱して庭園堂屋共に宏壯を極めしを、芳年借り受けて耳遠き老婆一人を雇ひ、上下唯だ二人にて住まひ居たり。歌舞の世界の片邊りに、此處のみ浮世の塵も吹かれ、さしも廣き邸園も今は昔の俤なく、荒れに荒れて蓬蒿剪らず寂莫深閑として、穢しと云へば無下に穢なく、清淨と云へば極めて清淨に、唯だ天然を樂みて丹を吃ぶる以外餘念無く、畫を乞ふ輩を除きては來り訪ふ者も稀に、已れは殊更一歩門を出づることさへなく、大俗界中獨り武陵の別乾坤を闢き居たるに、不思議や幾間を隔てし彼方の緣側に、人の笑ひ興ずる聲すなり。

芳年筆を停めて老婆を呼び、出で〳〵候はしむれば、華美な浴衣に傘携へし五人一樣の扮裝は、想ふに白浪五人か。當時賣出しの青年俳優にて權十郎、我童、壽美藏、小團治、團八の五人、毛氈敷きて緣側に腰掛けつ、何やら笑ひつ嗤きつ居たりしかば、老婆慇懃に手をつかへ何御用と訊づぬるに、我々豫て先生へ似顏の御揮毫願はんと存じ居りしに、今日御近所の大松葉（妓樓）にて不圖想ひ着きし五人男、直ぐに舞臺其儘の扮裝して罷り出でぬ。アハレ御庭先を拜借して夫々の身振り仕れば、先生へ御見取りの御揮毫願ひ度しとの挨拶なり。

老婆夫れを通じて再び出で來り、甚だ御氣の毒に候へど、揮毫の御頼は御免蒙むると主人の答に候と語りけるにぞ、何故ににべもなき御斷りにやと、五に顏見合せて不審しつゝ、兎も角も拜顏を賜はれと、再三推し返して聞き入るれば、奥へも通さず芳年自ら出で來り、強ての御詞ゆゑ御目には掛れど、お頼みの揮毫は嫌でござる、幷は何故との御怒り、イヤ其御尋よりは各々方こそ、何故に案内もなく他の庭に入り込み、而かも緣側に毛氈まで敷て笑ひ興ぜらるゝや。

這は思はぬ失禮仕りぬ、御玄關より屢々音訪ひ參らせしも御答なく御家内も靜かゆゑ御不在にや如何かと御庭の枝折戸の推せば、開くまゝ迂乎〳〵と是まで參り、又聲高く再三音訪ひ申せしかど、御答なくさりとて御不在とも見えず、折角準備して參りしもの、是非願ひ度しと、且つ話し且つ音訪ひ參らせながら、御緣側を拜借せんと打見れば少なからぬ塵埃に大松葉より毛氈取り寄せ……アハゝ聞ゆるまで幾聲にても呼び玉へ、偖聞ゑねばお歸りなされ。弊屋なりとも人の住宅、枝折戸まで開け毛氈まで敷き、大胡坐かいて高話し、左樣な人の似顏など書きては、可惜芳年の筆が汚れる。縦しや我慢して書きもせふ、されど嫌で書いては畫がまづく、此芳年の名折れのみかは、天晴賣出しの各々方の顏も醜く出來ん、今日は思ひ止り玉へ。又各々方とても今度はチト愼み玉へ、嚮では千兩の位に手の屆く身の、かゝる無作法は人聞惡るし、笑止の事よと、ツト立ちて奥に入れば、草生ひ繁る内藤御殿寂として人聲無く、晝を憚らぬ鼠の音のみ高く響きて、ショゲ返りし顏に默然たる間の抜けし白浪五人男、木偶の如く殘りける。

近時學者藝術家の見識妄りに低く、其の學問技術を商品と思ひ、對手の非禮など問ふ者無く、只管に名を售り、價よく沽らんとのみ焦慮りて、意氣地無き者多き中に在りて、浮世繪師の芳年が對手の誰たるを問はず、非禮を叱して其乞を斥けたる心地よさ、又斯道に携はる者の學ぶべき事ならずや。

老夫曰く、此談は亡兄の知人山崎某氏、東京の文學者畫家等の大概は知見あり、別けて芳年の家へは斷へず出入なしたる爲め、芳年自身が云々の事ありきと笑ひ乍らに物語られしとて亡兄に語りし事ありきと笑ひ乍らに物語られしとて、亡兄に語りし事を些の虚飾を交へず、其儘記して同好の士に示せしなり。

星石翁の書畫幅を和泉より、書才六朝の風格あり、余初めて京都の某旅亭にて翁の畫を見る、樹下に高人の圍碁を圖せし畫にて天真に出づ、晩年筆を畫料を得ん爲めの作にて概ね無列にて筆跡も亦た拙なり、今日蹄涔所の畫にて酒次不能也、天機に於ては焉ぞ之を得ん、翁の如きは名門の人珠玉

撮影製

○吉崎西風の家より雅号紙本三冊を、探幽に類似、西風自筆の書簡あり、西風は八田知紀の

でゝもの次天皇を仰ぐ元旦歌御會始の歌御會の年月を集するものあり、まゝて維新前の年を稱し異るもの心と見へ、元旦も勉と見へ、余近来名家の稿を蒐めよ殿本は殊に二百餘を數ふ、惟一の稿本を逸すれば終に獲る能はず、余もまた蒐集する所以なり、元旦同じ意味にて蒐集中のものとす、

○此書幅で反故を過ぐる者千を獲たり中井敬所の反故かあつと。四月三十日記

汪啟淑の行書の立軸を數年前自身蒐集して
る勾勒法の名しるものが出てきた。汪啟淑の行書
を見るは自今として初めてである。筆子が印の関係から
ん、如何なる人か、多分細の映字なるを
見ても察することが出来る。北の詩幅は叶田石
為田が京都で獲たものであるが後ち向山黄村の手を
しと數千ヶ紙隔て朱書してみるとは
汪啓淑行書立律 裏叶田石谷先生於
西京籐之寓玩有年以汝丁亥帰
向山黄邨先生寓為希顧也
中井董之識

斯く来歴が書かれても
字をやつてみる。赤漢銅印叢の朱樟の序を
細刻し、其の拓本が
啟淑のお傳に元つべきことである。北の鶴刻は誰
の為めかしが、序の拓本は潮村雅契属とあ
るが未だ見ない。知らず此幅今何処
あるや。勾勒本立紙は鶴助雑爨ル收めて保存
ちとす

五月一日記

旧知人から、伊勢の山田の俵前屋と油屋の配り物
土産のせんべいから、鶴助雑爨ル張り込んだ北の配
りもの奉書紙の伊勢音頭を印刷して俵前屋の
しい行燈車が彩色で元禄とあるを、外を締

りの図が一枚ある、油屋の方は奉書の半分に油屋の
家の図があつて半分は伊勢音頭が描えてゐる。
油屋の方のは時代が古るく、備前屋の方は洋服姿
の客が見へるから新らしい。此等を見ると若い頃
の事が思ひ出される。自分の遊んだのは確か明治廿
三年であつたと思ふが、自分の登楼したのは油屋で
あつた。其頃油屋は旅館部と妓楼部と別になつ
てゐた。共に大きいものであつた。自分は先づ旅館に
落付き、夜になつてから、妓楼の方へ行つて見た。百畳
も敷くほどの入りこみの坐敷に、あちこちに衝立
に仕切つて種々の客人が夫々酒を飲んだりして
ゐた。例のせり出しで踊手を左右の縁から出す坐

敷は別になつてゐて、雑客を共同して其席に入れ
れば料金の頭割でやすく、一人で入れば全部一人の
負擔であるが踊の見料は四円其れ、壱円であつた
から高いものではなかつた。坐敷の体裁はすべて大
名の大坐敷に倣らひ、大床の前に緋毛氈を敷
き蒔絵に烟草盆や脇息を置き、其の左右
に緋毛氈を敷て、雛方や三線弾手が侍女らし
く居並ぶさまは宛から芝居の如くである。せり
出しが始まるとぎしぎしの音が響く。双方から十五六
人づゝの揃の衣服を着けた妓婦がせり上ると、
それが躍りながら左右より中央に会する。踊は極め
て単調で一時も極めて僅かの間である。実は踊を

榛原製

見物の内で、踊手の内から客をして高（選）差のめ
を選ハしむるのであつて、附添の老婆ハ客に接近し
て何番目がよいかを尋ねて敵娼を定めるのである。踊
りが終ると、せり下つて、廊下ハ室となり客も退席
するが、敵娼が定まると、大きくもない部屋に導
かれて、そこで酒宴もし、亦寝（臥）もする。此の娼婦ハ
あくまで親しくして(?)實に親切で、面倒(?)取らず、流連し
て滞在すハ何日でも支度すことくに附添ひ、無用
の散財をさとさしめさるやうに注意し、可成長く滞
在せしめるやうにつとめる。是が為めに慈かれて滞在
数日に及び旅費を使ひ果し、宿で旅立(?)すらぬことゝ
せらると少へ帰る(?)酒屋ハ例のお供と主人が待兄(?)しれので

名高かく、其れハわざわざ待兄(?)の部屋と云ふがあつたのそれ
ハ一番下の茶室のごとき小座敷でめつたに陰氣な
室であつたが、是を見る座にせり出しの装置も見
れが、芝居のせり出しと格別異つたものハないのであつた。自
分ハ餞(?)部に帰り朝酒をやつて居ると、娼家の女中が
前夜の禮に来て、娼楼の配り物と娼婦の名をさへし
出す。配りものハ即ち伊勢音頭と踊りの絵の印
刷物で、娼婦の名を確かに記憶してゐないが、なまめか
しい文句を版にしたものであつたやうに思ふ。其古風
の處に興味があつて、女中を相手に酒を飲んだが、兎
もすると此女中が媚(?)んで娼楼に戻ることが常だと云ふ
が、自分ハ幸ひに其危を免かれた。此の酒屋と云ふ家ハ

居候行雅の大の家新家で悪逆の者の都合屋敷跡の事
力を入れると云へども公は油屋敷前屋敷の繁昌を第一
とみるのであらう。的流の初年は堀越を属したこと
がある。然るに大隈侯がまだ外人の建物を壊すの
の巡回をやつと時外人連が古市の踊りかた
ないと云のが、侯の初事の申のみを臨時の踊らせ
たことがある。其時楫主は初事を面折してさん
く毒のきかぬを弱らせたとか大隈侯の実話であ
る。

○桜田事変の井伊大老が横死したのは自分が叫ぶ
事を揚げて聞もらうことである。自分は二月十七の
生れて事変は三月三日であるから、僅うし十三四の頃

複原製本

なるのみである。即ち自分の歳と同しく七十三年の昔と
なつた。此事変の真相に就ては、こんまで書いた
ものを見たが、ハッキリしたことが別り兎角に
浪士が大老を殺すのが惟一の目的でなく。こんを手初
めに外藩連合して錦旗を擁し、天下の候を召集の
あとを振く、接夷を行ふと共に幕政を改革さんと
目論んだのである。薩摩の形勢が変じて目的を
達し得なくなつたと云ふが恐らく実情であらう。事
変に無つた水戸の浪士は普通十八人とされるが
実は二十二人で内二人は後事の為め国事の為め
別れ、又は手引の一手で実際は十八人であつたと
ハつてゐるのが、この二人こそ主要の人物である。尚は南の物

立つ上まで中で七両を警護の
屈都三十両八作使の役割であつて
高麦の後を実弟文八つれのて、
であの騒きが行われ、すべてが
えそのるが中二人落の浪士の如く偽へ
陸連署を策した一通とさんてある。
殺傷の騒きは十五分と云かが、浪士側も手負が少くとも
うち二人は場で死し四人は引揚け途中苦痛のため
自殺してある。大老の首を刎ねて、有村は
佐河味(完)を刺して当所へ行く(途中斃れて仕まつて、首の遠参
但馬守(五年守)へ頼かれた。井伊家の首を

取り度すことを以どく苦心し、斎和家臣二人を遠差
郎く馳せ、今朝新死した家臣加田九郎太の首
引渡しを頼むと、大老の首とは云わず、抱会つれが
投死が済まるまでの間の渡さえるのと拒絶された。赤他
の家臣を流して懇請したがそうしても渡さるのので、や
ット投死が済んで、諸方まで元えて首を引えつれが
文張加田九郎太の首とをして受えのである。井伊家
でハどこまでも大老の首体しなさぬと粘い、分を
水元を請願した。伯平家
井伊家の相続ハ嗣子亀麿さんの
えん心家が断絶するのであるから、命七えれる井伊が務死と
あることい言ふまでもない。斯る次第で井伊家で

八日の夜、復讐とてやつたが、幕府から其をやむに家は
断絶すると聞き先し比のでいた子供たち家は共に涙を呑
んで耐まつた。井伊の葬儀は三月の晦日に営まれた
とぞ

此の事件で多くの人の心膓を砕まつたのは蓮田市五郎
である、市五郎物が自訴代りあつたので深手で
死なないので、其役を引受けて、公儀と申開きまた時
の応答をして居ることゝ為めて、尚的から名乗
があつたのであらう。此の騒動の後、自訴者の一二
の扱戻と殺されたが、中々脱走をしたものも
あつて、身を高人やの子息等も脱落志士と謀し合はせ

榛原製

やうと運動中、急子が捕えた、事件は仮吏に
聞まれて四天王寺で自刃した。

梅の事変は白雲紙理先生を教唆した幕吏
であるが、おかしな噺し、其から赤穂義士と
の井伊大老を憂国奴と誤解したからの事だ
と等が漢学の先生などの詩章や行状や記録紙幕に
がいろ〳〵印刷されて、さまくの冊子が出たが
書生仲間では之を読み梅の志士に同
情をよせたものであつた。

五月二日迄

○後始末　廿五日未記本の内容は其後の古浄

複製本解說

むねわり　一冊

（原本　安田文庫藏）

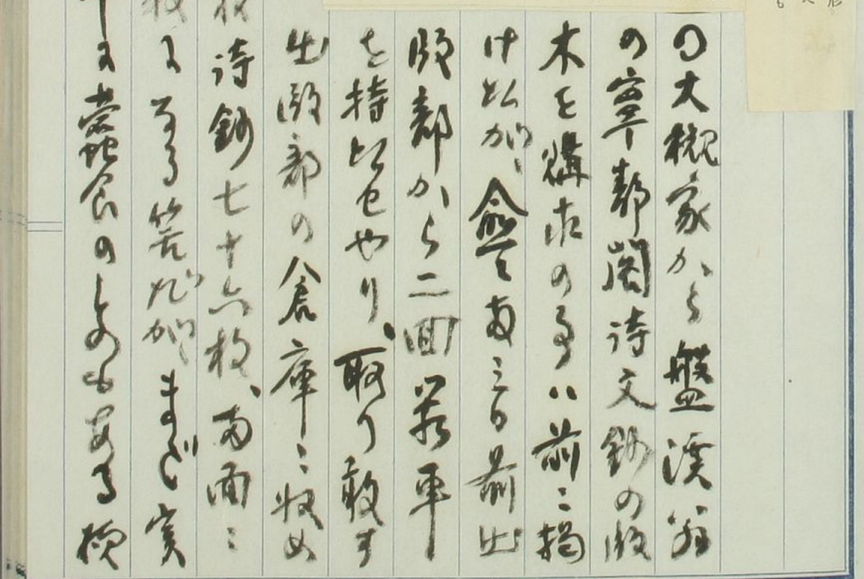
元和以前より行はれたる淨瑠璃に『十二段草子』『牛王姫』及び本曲あり。本曲正しくは『阿彌陀胸割』にて、その名は『時慶卿記』慶長十八年九月廿一日の條に「雨天、院參、飯後阿彌陀胸切ト云フ曲ヲ仕、夷昇ノ類ノ者推參シテ、於御庭緞子幕等ヲ引廻シテ有曲、奇異ノ「也」と見え。また『言繼卿記』の同廿一、廿二兩日の條にも同樣の事を記し、それには『阿彌陀ムネハリ』とあり。また前田利家夫人芳春院が、慶長十九年六月加州金澤にて、本曲及び『牛王姫』の操淨瑠璃を御覽せられしこと『三壺聞書』に見えたれば、京洛以外の地にも廣く行はれたるを知るべし。これ淨瑠璃と操とが、全く結合整備せるを語るものなり。當時淨瑠璃太夫として知られしものに京の次郎兵衞ありて、四條河原に芝居を建て『鎌田政清』『牛王姫』と本曲を語りしこと『東海道名所記』に見えたり。次に『淨瑠璃太夫口宣案』（寫本）にある河內守藤原吉次等なるべし。

本曲の古板本はいと稀なるものにて、水谷不倒氏も、その著『繪入淨瑠璃史』に、寬永及び慶安の板本ありと聞きしのみにて、遂に寓目し得ざりしことを記され、『德川文藝類聚』『金平本全集』の編輯に當りては、共に享保版を採用せられたり。今回複製刊行せるは、安田文庫所藏の古淨瑠璃本にて、慶安四年の板行なれば、現在にての最古板と謂ふべきなり。

本書と十二段草紙とを比較し
て日本淨瑠璃史の左の如く
記してある

複製

これを『十二段』に比するに、彼は物語風の雅文にて、內容よりは形式の美を貴び、文章頗る絢爛を極め、古淨瑠璃中には素より匹敵すべきもの無く、室町時代の小說としても名文たる事を失はず。然れども形容の誇大に失して、實質に乏しく、和漢古今佛經等有ゆる引事の煩に過ぎて衒學の氣分の橫溢せる等、凡て貴族文學の色彩を帶ぶるに反し、これはまた殆ど飾り氣なく、文章としては殆と見るべき點なく、唯簡素にして達意を主としたるは、是れやがて中流以下の趣味を表示するものと謂ふべく、內面の充實は遙に『十二段』に勝り、殊に趣向の奇拔なる點は、古淨瑠璃中に傑出せり。蓋し慶長の末には操芝居一般に流行し、淨瑠璃も是迄の如く、中流以上に賞翫せらるゝのみにあらず、一般に持囃さるゝ事となりては、其多數の見物は概ね目に一丁字なき階級に屬すれば、文章の如きは平易にして解り易きを貴び、事件も廻り惇き形容などを避けて、直接法に、通俗的ならざるべからず。殊に昔の淨瑠璃は素語りなりしに、此頃に至りては、操に懸け、耳に響くよりも目に愬ふる必要上、文章よりも事件の面白きに着目せり。されば多少趣味の低下は免がれざる所なれども、其の趣向の上には一段の進歩を見るに至りしなり



また、笑いのコンナ形状を受け込んでもどうーやうものが、全く新とそうることや、日刻字を刻りつおすことが情しいと思ふ迄きるのである。悩む自分が故人の私印をもつことを保存してみるのと同様の心意気で古の支那の昔し王侯貴族が宮殿をやつた。日時代の舞楽役人が宮殿下る犬が吠るのに笑とうふ宮殿が竹下る犬がみて何故おかしいのかと、王侯あれもがフンと笑つた。支那も日本でも笑を幸の形とこゝろ。笑ふ方うん福来るとゝふ諺がある、サー望くうーく笑堂福聚をいもゝふてみる。誰れやらのうふれ言葉い

仙人の住まる不老長松別の和歌迄がある。でもうへ、但れへることふれのもんきなことをゝふれうふであらう。笑ふ身体の死後も由つて生するうむび愉快な形である。堅苦しもある時も笑ふうへ。真剣の時も笑ふうへ。真剣から脱すると笑が起るのが自体が他後するからである。どう悩くても悩くれるうへで笑を爆発することもある。笑ふ陽気な形である。哄笑うむふ語のあるのは悩んで笑ふの形容である。世うの笑を受るの高笑もある、嘲笑うむも此の稼業なから通例の義も奴やも他今のーい世を云て愛笑婦とうくい義も

のである。俳しそうな表情の笑うべき真情は伴いそういから意
味である。客観の笑いでも笑われる手があるからおか
しいのだが、実は笑うも種々の形態があって、甚だ
単純ではない。例えば注きの笑とかいうのは悲哀
交々到つた場合などにある複雑の笑いである。苦笑などは
その笑い意味する不愉快の為めに生ずる笑いで、捉どころ
なく笑いのである。笑いで共場をまきらすのである。あ
さ笑とうると一歩を進めた積極的に罵詈を形
容するのである。酔漢などがよくこれをやる。笑上戸とかいう
笑いがある。怨り上戸を戯れたいう如き意味
もあるが、これとは罪いう。罪のある作り
笑いである、おかしく無いのに笑うのである。これの真

いの表示である。また、氣を吐くのでもある、無意味な笑
いのである、陰合うような意味のある笑や利口振った笑は尤も忌ましい。何がおか
しいかと問くなるような兎もすると人を論破が潜んでもある、お手
全体そくの場合笑うべきの氣合を和らげる。其の霊と葉ちんとするものも
あるのだ、商人などは習慣的に笑うのもあるが、甚だと
卑屈の形態で、往々人をして吐吐を催さしめる。尤
も笑いは愛嬌的に動をひくのだ、無闇に笑うのみ
があっても、甚だ不愉快
のだ、笑が相手をうるさがらせるのみでは、甚だ不幸か無闇に笑うのは遺憾
を免れる、真合のよい幸

を受けて居らぬ
如笑の千代の句に「春雨や土の笑ひも吃と鉄う」と
あるは ヒギエアである。木術上で凧の為めに帽子
を吹き飛ばされ、之を捨てんとかけ回はるのを
見て、人はその滑稽の態を笑ふけれども、求婚
者がいろいろの婦人を追かけ回はるのに較べれば
何も笑ふ程の滑稽ではないとはチエスタンドの
警語であるが、哲人の笑の解は流石に高い。

「山々は笑ふても富士の高根かな」もヒギエアである

小児の嬉々として笑ふは好し、少女の笑ひ崩るゝも好し、
気味のわるい笑ひやう、意味ありげの笑ひやうは好か
らず、壮年たるべき紳士の人の羽目を外した笑は好

嘆を発せしむる大笑いは宜しからず

からず、概して婦人の高く笑ふは野卑なり、笑ひ作ら
すと云ふことあり、笑もうかうかと陰険なことである。笑は
或る場合に於て侮辱である、昔しの借用証文に違
約の時はお笑ひ候とあつたのも侮辱の意であ
る。ユーモリストとは笑の持主であるけれども、人を笑はせ
る事の多くは少しも自から笑はず、極めて真面目の態
度で人を笑はせるのが名人である。下手な奴は人の
笑はぬ前に先づ先づから笑ふ。
笑にも種々の形貌がある。豪傑笑と云ふがある、磊落豪
放の笑振りである、相手に頓着しない態度を示すもの
常に他人が胸を開け放し込んで唯々笑ふのみでび
含くわい、こんなことは笑ても不会心なのづら例とする族ら

の笑ひ（ゲラ〳〵笑、へラ〳〵笑）
である

○多数の中文行書を認めたる石器一面（他銘拓本
を添ひ得たり）石器は山中（谷合）の平（笑の意）地に
散乱（包蔵）せるもの多し、一々包紙と採集
地注しあり、他にあまりのものなし。若干あり、北内往石
往貝とあるこの字の始めて見る所也（所謂る廉
候の納往）、往文の字を一ツ若くは二字石や貝
に書きあるもまゝ迷信さまざまの北の往石を房総
都々逸にうたひ込めば流すること云々とある、貝往さい説
法の二字書きあり、左まで往貝往石の採集地を
挙ぐ

上総国長生郡大字東柳七ツ塚　貝往
房州小湊誕生寺往石
武蔵国大里郡吉見村字曽山根岸氏
　後国所出往石　二個
陸奥国郡村不明往石　二個
筑後三井郡三井郡所の信玄良山中極楽
　寺産品地不明往石
鹿島神社跡出往石　文曰宝寿
石谷の南外四方一ツあり、花石の注二云く
北石谷小（近）衛歩兵第二聯隊第十二中隊の曹
井沢次郎氏祖霊の役（陽）ら東北方約三
里丁香（ヂャンシャン）屯ル部落土人の家ある得ら

とて劉錦紀念に金を贈られしより又此ひこ来も
七一羅約五十四の洋字あるものゝ雷兵の
肩標より是又黄井氏所贈のもの成ん袋に蔵
し石谷を以て此流三十八年十二月廿一日
山中共古記

砲銘拓本半六枚階下府烈公纂録の揮毫そ
すべて此印あり、款識年月を誌すもあり、砲の大
小一ならず、長きこと六尺に満つもあり、鉛ある
大抵砲の背を摸む、右之通荒手を挙ぐ
左撃而倒
威雷電

耀武以慶其境
震天動地
逢之則砕
守在海外
放之則勝六合
剖勝千里外
撃如雷霆

凡そ如斯、砲に鉛ある恐らく
八、予往年病後為すことなく数々旨(旨)就銃に游んで
砲銘ある砲を見、其鉛を穿し来りしことあり、其際
こ思へらく、筆の鉛の筆ならざるごとく砲の鉛の砲らしい
ものかなと、弘府の砲七分い恐らく旨(旨)就銃に施し

あるん、寺の見なる鉛ハ恐らく北の平六牧中のよる
んぬ北の拓本(金石中の異彩とす、余欣然之れを
購ふ
五月三日記
○時序も偽りの無くこと一も春が来て国中の諸木
ハ皆葉を吉し、木蓮)先つ花をもて魁をなし
山吹漸やく綻し、茶花今盛んに開く、紅白の山茶花
も花ざさの満を持つ、薔薇や萩や霊萩や漸や
く天に満んとす、前園の洋花もマルガレット既く花
を吉し、スウエトピー又花を放んとす、庭園満
目一碧眼迷ふんとするもの新装成る、松雪
に備ふる松の吊縄ハ既に撤しまう、堆を為す古葉
皆な掃ひ盡す、今ハ草木の春時代なり、老

○文部省の昨今インチキ学校征伐に従い従来の内容を調査してみると、先ず手を下し
ものが大概校舎その他設備の十分
をもって学生を募集するかどうかを
とその内容のよろしき者を選んで
他の受験者の及落が定まり、特待生の多寡
八分や商業に準じて別もあろうが、千円二千円を投

供することが珍らしくない
くらの校もそうくらの
この契約とくるとなれば
八三万円乃至八万円
別収入が無いのの校
てみると、文部省は
云めてみると、又新る手
退学のセしあると共
そうして卒業入学の
的な入学のセしめるとも
行のん得るかどうか、
する大鉈を振い、教育の風儀を正すの清涼剤

試驗官が受驗生
獻金者の落第點

…學校側から名譽毀損で訴へられ略式で罰金五十圓に處されたが正式裁判を申し立てた結果その公判が三日正午から東京區裁判所内田判事、折原檢事係で開廷された、折も折文部省と警視廳ではインチキ學校退治に著手し實たる世論をまき起してゐると

…專門學務局服部學務課長および木村督學官兩氏を證人に申請、許可となり午後二時開廷した、次回は來る十四日

少將邸へ記者

加筆、及第點に
更にインチキ暴露

インチキ醫、藥專や醫大征伐に起つた文部省では三日專門學務局の手で默禱を練り既報の通り四日午前十時から文部省講堂に於てインチキ征伐の最後の彈劾默禱を得るとになつたが默禱を得た上は川村法相、大野總監とも協議の上、徹底的にインチキを除去することとなつた、三日までに集まつたこれ等學校內のインチキなカラクリについては實に驚くべきものがあり、赤間專門學務局長などから報告を聽取した鳩山文相は斷乎決意をかためたが集められた調査要項のうち最も甚だしいのは某醫專(特に名を秘す)で文部省の調査隊が赴いた時には「受驗名簿は燒失してしまつた」と稱して提出を拒み、やつと受驗答案用紙のみを提出したが係官が答案用紙を調査したところ明かに受驗生が白紙で提出したものは後になつて書き入れたと認むべきものが多數あり、しかもその筆跡が同一であることが立證された、これは勿論金錢提出を條件に入學を許可されたもので、その反面に優秀な成績を得ながら入學不許可となつたものがあることを如實に示したものである

犧牲の受驗生は
強制的に入學させる
鳩山文相決意を語る

調査報告を聞いて驚いてゐる、不正入學があつた反面にはあたら良好な成績を得ても入學出來なかつた者があることは思想を惡化させる大きな原因だらうと思ふ、文部省はかゝるインチキな手段の犧牲になつた受驗生が受驗番號を持つて出頭して事情を述べて貰へば、省としては事情を調べて強制入學をさせるつもりである

折も折 この公判

昭和五年五月號の雜誌「改造」に「金がものいふ慶應義塾」と題し「醫科に入るには千圓、經濟科には五百圓の裏金入學金をとる」とか加至は「學年末の及落も金で解決される」などと書いたため同雜誌編輯兼發行人鹽井眞澄(三)執筆者氷井正次(三)兩氏は

模原製

(水曜日)

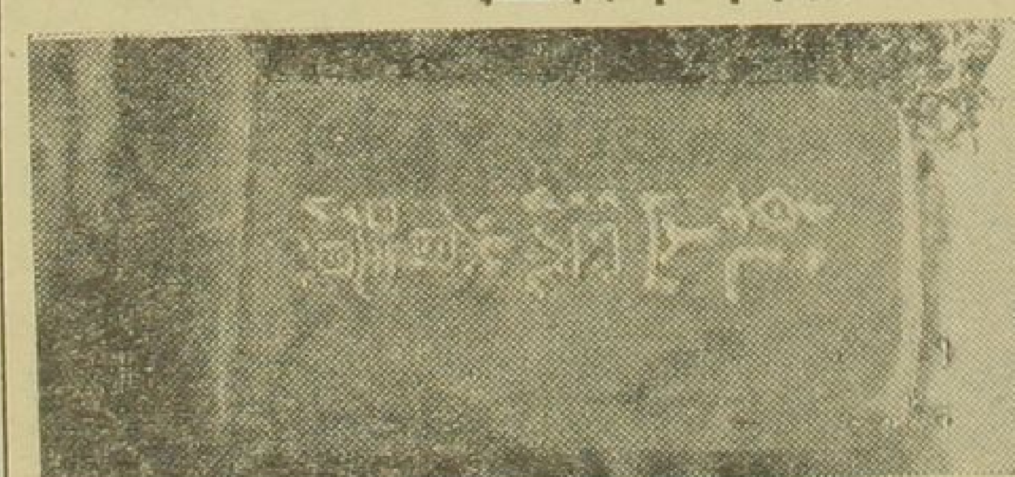
○石川縣の千代尼、友禪の墓は共に金沢市を離れた片田舎にある。去年金沢に往つた時見たうとしたが道が隔つてゐるので遂に見ることが出来なかつた。矢鱈人に訪づれられずにある墓は皆無事であつて、棄てられもせず移動もせずともかくも。同じ藝術家の墓でも大都会にあるのは都の形態を保ち、いろくの変化がある。乾山の墓は嘗て谷中の志ほ原の割烹亭の庭であつたが、頃現下河今も見られることがあるが、その後いろいろ変遷してやつと菩提寺の庭つれとなつた。永く偲ぶべき名流の墓は都門に置くべきである。田舎こそ之れを永遠に保つ安全地帯であると感ぜしめる。

加賀の千代尼の墓（石川縣松任町聖興寺金澤電軌沿線）

友禪染の創始者友禪齋の墓（金澤市卯辰山下龍國寺）

乾山の碑
が廿一年目で
菩提寺へ歸る
記念にその名作展を開く

[illegible]



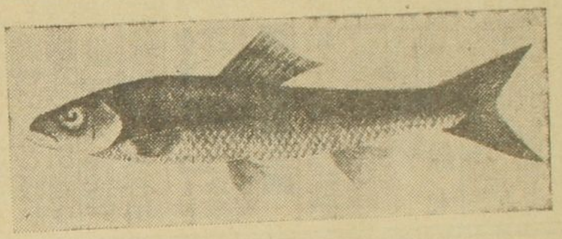
○…西巣鴨庚申塚の善養寺へ歸る乾山碑

榛原製

○富久の手紙は此雪の書の表装をそめそめこ、とんな表
装にとそんバ白紙と盆紙とでよく掛物されてあるとよ
ふみやうも此雪の衣裳のふさはしい。富山の姉の子

明治大帝の愛魚『ヒガイ』釣り

關西から移殖されて いまや關東の名魚に



ヒガヒは、元來が關西特有のもので、宇治川や、淀川、瀬田川、殊に琵琶湖に多く産し、關西の釣人をよろこばせるばかりでなく、畏くも明治天皇が非常にお好みになつたといふので特に魚ヘンに皇と書いてヒガヒと讀ませた程の名魚であるそれ故その料理も琵琶湖京都の名物とされて、無上に珍重されつゝあつた、ところがこの關西ご自慢の魚も關東に移殖されてから早や十四五年、始めは靈ケ浦へ放流されて、その後三年位にして、土浦の櫻川で釣れだし、遂には牛久沼にも放流され、關東の釣人をよろこばせるのみならず、有名な關西獨特のこの釣趣をほんのお手近で味はふ事が出來るのも有難い極みである

釣り塲案内

□□□ 仕かけと釣り方

釣り方

牛久沼や霞ケ浦の様な流れのない釣り塲では浮き釣りがよく、中川の様な流れの相當ある釣り塲では引つかけ釣りが能率があがる、さゝぎ…は二間半から三間位の竿目の軽いものほどよい

仕かけ

道糸はさゝの全長として、關テグス…は七八毛柄の上等テグス。

針素…は七八毛柄の上等テグス。

餌…はエビ、イトメよりもゴカヒがよい様だ、外道が來ないから、この釣りの方の掛けつともいへよう、食はせ釣りでも、かけ釣りでも、最初は餌をなるべく大きく(二寸位)つけて魚を寄せる事が肝要で、當りがあつたら流れの上の方へ向つて輕く合すれば間違なく釣れる。

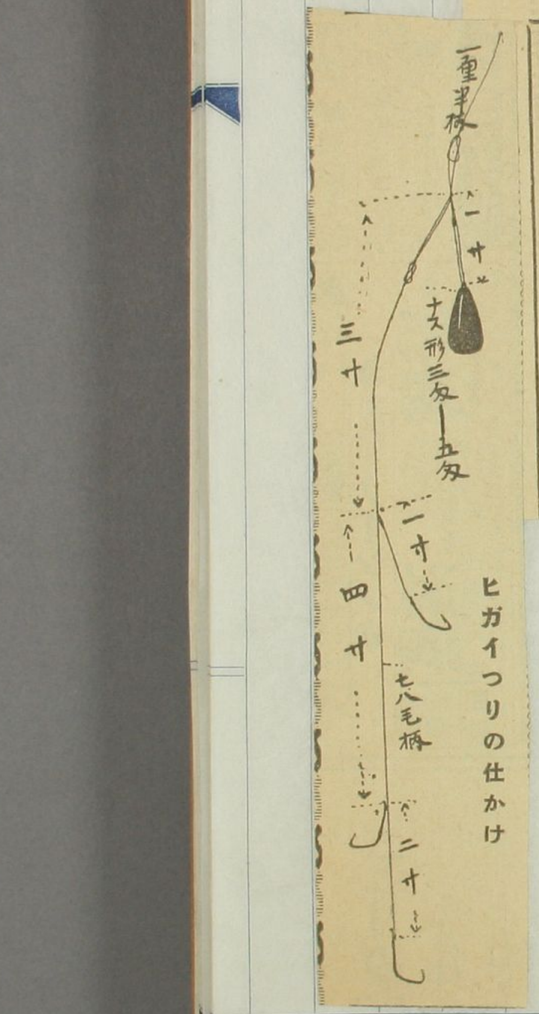
ヒガヒの近い釣塲としては江戸川や小貝川でも釣れるが、常磐線の取手驛で下車して乘合自動車(往復五十錢)で戸田井迄行き、藤代から流れてくる五間川の神の浦へと通ずる堀内の付近を釣つても三四十尾はまづ樂に釣れる、市の郊外の極お手近の「洗足の池」でも釣れるからうれしい。

こゝは大正十三年の十月頃、高橋藏相のご令息是彌氏、木村貫一氏、牧謙二氏、黒澤遼氏、平井貞一氏、山際五十男氏、故小池順氏の諸氏が、土浦の櫻川へ出漁した際、その獲物の内二十七八尾をこの洗足の池へ放流されたものがばん殖したといふ歴史的釣塲である、何分狭い池の事數は望めない。

次いでは江戸川から流れ込む中川筋のヒガヒは素晴らしく有望だ、六ツ木邊では無暗に魚の當りを見るといふ程だ、頃く多くばん殖したといふのは中川がこの魚にまことに適したのだと思はれる、だが普通の釣方ではなかく〳〵かゝらない、それに昨年綾瀬川に通ずる運河が出來たためかこの頃では少し釣塲も變つた、潮止橋の上流——馬場の渡付近が大形が多い。

前川村字三丸——馬場の渡付近がよく五六寸の大形が多い。

道順は常磐線綾瀬停車場下車でもよいが、金町で降りて吉川行き乘合自動車(片道二十五錢)で行つた方が便利だ、貸し切りなら一台一圓以内五人も乘れば至極經濟的である、乘合自動車の金町發は午前七時五十五分と十時二十分いづれも吉川行直通である



ヒガイつりの仕かけ

かけ針で釣る時は當り始めたら、いつもさゝ先で一寸位づつ空合はせをこゝ一ぱく〳〵して居るのがこの釣の呼吸である。無理にかけ様とする強い合はせ方は禁物、餌はいつも一寸位にして大き目をよしとする。(石井市藏)

漆原製

○朝未明家を漏れ村山秋浦飯塚彦次郎七兵衛
二存り、あいろく風体福も出ル、飯塚の話も出ル、
浅草華山の菊池長四郎の先代とか記文があつ
て、常て名書を婚礼のとき贈られ、それを
保存されてをり、それを見ると百五十四の祖
書いてあつて、漢文で書かれてあつた。実際宝永
つたものが見事のれから近
山八句吟を詠み込んであるので、追々何か書
いて返事に代てやるといふ約束をした。華
華山も露庵の山水に八句の発句を添へて
菊池の家に伝存してあつた。華山の書簡

を捨てと、先の書いて上げた山水の画を
元も自分の不勉強で恥入るから、どうか返し
て欲しい、別に書き直して差上るといふ意味が書
かんでゐる。露庵は五十九歳で死んだ。
ある様である。露庵八俳大名五重かさね
逸事を残してゐるが、女性に関する珍話も残つてゐる。
ひであつた二十才前後に溺んでいろくの
因に曲連の折、或る橋の娼婦に懸想され
紬縞の関係が生じ、橋主の梓の取計ひで、一
室を売てやつても四橋せしめたが、但し条件つ
きであつたと云ふ事に落ちが有る。娼婦ながら
の無い時は支払無用と丸りでゐるとも差支ないが、

久々ある時に逢ひ更しても賞られいと云ふことも
つひと云ふ、其の頃屋の香いひ粉本の来る方を世の
顔が三ツ四ツ宛つてあつて、さんこ雑禄があり、此も
八面頗ハ不即ハが淫中の味ひ忘ん難いものがあつ
メと語る、又ハ芸つて飯伊珠翁しことがある
とこふ、村山秋浦と嗤ちえ其校友不持の山陽
の詩帖を獣署し此、山陽の詩ハ左のやうである

一盞髭跋茶梅園雪侍維摩室是ね
誤託後身香世界天花却深自家衣
戯題梅林尼庵　山陽外史

此詩余の初めて見る所で知らず詩集に収めて
あるや

四月六日記

複原製

○日本橋の千代の鮨に例会ある古書籍即売
後に列り一二時間漁りた処の戦利品を次の
如し

ポンペ氏聖意集　原主源一郎旧蔵
英文劇の小道具　具二就てスチーブン、エヴリマン
正倉院楽器の研究　東京帝大教授
原始民俗画考　南江二郎著
性愛娼妓考　綿谷雪旧蔵
納札大史　金山克巳著

娼妓考と娼妓に関する明治以来多く挙げても
よく字つゞのものもある

○我ながら恰気の帯の締り過ぎ
○仲間く音や恰気を脱しても
○鍋の火がもえてもまだまだ燃り

○うしと見し秋を恨るうらしい神話で
○いは女恰幅を大針と逢い
○りんきのおすまし立色ものと
○焚付る恰幅の顔くもえて出る
○手えくもえるり某の丝車
○手の付んでめしい女房は目を付る
○おく秋の見る所腹の立つめ（立の女は妾）
○憎んでも憎いうら向（男をもんだ妾への嫉妬）
○るせ急ないるさと女房縫はぬ也
○勘けも女房義時と出来
○女房の腹の立所花と立ち
○月夜烏帖も女房腹を立て
○女房を猫き朝かくり

複原製

○火もうてこれの
○朝かくり女房の舌の利剣
○朝かくり女房舌刀とぎすまし
○細見く女房こいつと焼きる
○胸ぐらの外を女房の手を切
○主手を行く女房目庇が上つる

納札（神社仏閣巡拝から始まり、昔は木札や銅
牌などを参拝の印として納めたものが、花山院入覚法皇
が納札それぞれの名に刻したものが、今も西の長谷
院に有ることから、参る人の天竺、仏平が納れの
祖とされるが、事実の卵割さんかの珍

とされるが、弘平が六年大宝四年土山大宮四年上この池
附近の岩上に「弘ま」二字を刻したのが始まりとされ、板碑などの納札と見做されるべきものが在
々ある。昔一の納札が「会入り」であるが、これが市井の
社交の具とされるようになり、紙製となり、随分俗気紛々たるものもあるが、巳が名
を宣伝せんが為の広告（仏閣めぐりをする、
の回数の多きを誇るもの、又は絵馬
形のもの、錦絵形のもの、名刺形のもの、歌舞
あるが、中には極彩色で十数段をかさねたものもある、大きく
から納札番附も出ておる。納札屋なども出来
納札屋などもやうになった。

前年日本風俗の視察に来た スタール婦人も
千社納札に興味を持って千社詣中と交いり
納札を蒐集しつゝ南も納札をやってみようし
私儀も「中仙道」旅行の時記念の為めにと心
つゝ、納札百枚一束「中仙道」全部を廿
束入つゝ。美しい芳一の一枚
湯社の名帳の式を倣つて中仙道全部を廿
四枚に分けて、紺紙の上に金泥で右駅の名や山
河や人家が書かれてあつて、上頭に色紙形に五
人百一、の人名があるのが誰中の四人の名であろう
かと、五中の一紙に寿多有協士中仙道旅の
記念 大正十五年秋催睦誌中とあり、表紙
表、五中の一紙に寿多有協士中仙道旅の
記念 大正十五年十月廿九日 庄司烏蛇亭墓

とこれも細紙全部の版である。北斗七星大正十五
年十月廿九日の紀念納札である。スタールが其の友人秀敬
納札会を催した時の記念として作ったものらしい。
此の図案の如き旋転のものが出てゐる不二前掲の如
きスタールの紀念納札を始めとして
琉根花蓮」が手の入つた他に
植木株式会社が心つかれた原色で印刷した一種の花譜
を菓書館のプレートにしたもので、重さ七百根五十六種
がある。各紙の裏面には和洋の文で和名や花のことを漫ろに説
が附してある。

新の花譜が座右の案内書である不便を感じたが、寡の
注文することゝき、油法の花譜が既に出てゐるので、姪
に送る風し此。花屋の店
一花一枝とそつても整つてゐることが緊の入つた
余往年印癖嫌んでう時印の蒐集に満足する
能はず、自家の経歴を印譜に寄し数十を作らん
ことを企てゞう。早稲田の某舎や附近の故旧を
印す入九人と金四、八勝を送(人)う早稲田解案
の時を寄のセンターに角
印譜を出らんと擬一ることあらくが半年過ぎ
現し刻手ろく路の果さず一てこゝみ。偶々北
の印友長々一詠一長と
小印譜を松

標原製

案在前こゝの人の心
絵に住し其の詠する所時早稲田印譜とうつも亦始
時を出るう。日一て
けず、唯此教ある所僅かに十二顆を送(き)ず早
稲田印譜とうつう不備をとも余が當て
楽しむものと近の
のことの他人も氣うくまでと一笑婚めて神の
て始くる、此印譜市早大を称する時こゝく

誉重高従り跋渡慕世偉人断所名
唯是迎其的新狸岬今岁優初後出彩
仙東秋早稲の的流十七年大隈伯奇縁の
田没市街開前棘達学重常も様一者実

○この日曜の閑に乗じて上京、節を曲げ日本
中の民俗美術工藝家を訪ねてそれぞれ
個性美術協会の主催する展覧会に係るものや、山東北
地方の各デパートにおける蛇々催されるから、北の今日この
本の大きなものと現のものが陳
列されて女数へ実に二十万もある
旧称を発行してゐる。日本の多くの美術
の人々の蒐集に係るものが一堂に
此年外国人の手に成る美術
秀る種々のものを蒐めて
ゆへる風潮が盛んなるに

標原製

来ることは喜こぶべき
多くの小品を蒐集し
してゐる折柄だから、北
九。大体日本の工芸品は
匠のグロテスクである
着眼し得ること、特徴
産び七主流び、グロテス
発出流そのもの
大きな馬を描き
いにまるでいる
まるでいる
の不気味に係る琉球の

豊商の多数が、こんなにの多数を一堂に見ることは珍
しいことだ、きんくの文教を見ると琉球の工芸
も決して劣稗とは云はんそのことを感じた。あまの
変化の画の工芸で俗り難いものがあつ
た。進む一々挙げ難いことを遺憾とする 十月八
日記

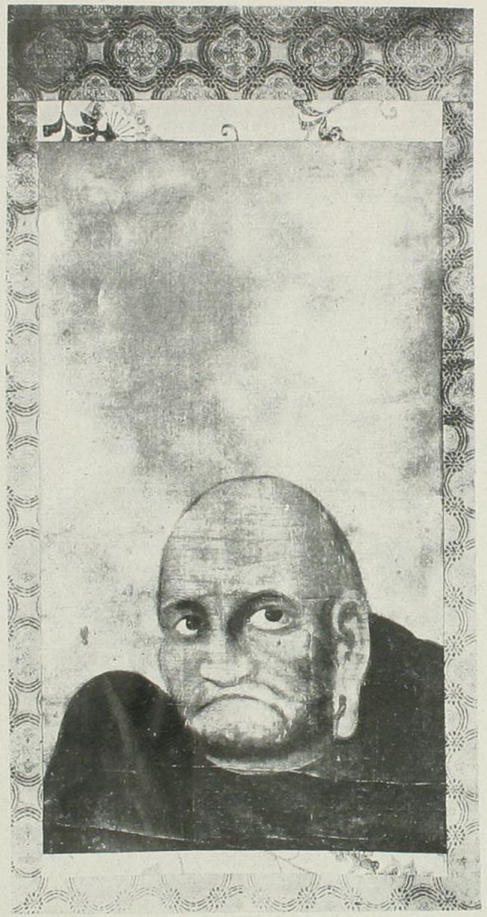
標準製

稿原製

以下
9丁
白紙

閲覧室

古南蠻畫達摩圖（紙本條幅）



東京　麻田駒之助氏藏

本畫は紙本へ油繪の具を以て描いたもので、南蠻畫史上から云ふと前期、乃ち葡萄牙系に屬する寛永頃の作品であらう。技巧も洗練されてゐて却々に優秀であるが、色彩殊に纏ふた緋の衣のそれの如きは、感覺の尖鋭もさることながら、今描いたかと思はれるばかりの鮮麗さを保つてゐる。そして圖であるが、それは祖師達摩の面壁であるも、實は使徒の何びとかを描いたもので、爛々たる眼光もて幻影でも追ふかのあたり、デウスの御許への憧憬、忻求に燃える信念を語るものであつて、耶蘇教徒が禮拜の一對象としたものでは、の流れは俄にはゞみ得るものではなく、白磁の子持觀音像をマリヤに擬し、ひそかに禮拜した當代のことであるから、どうも左樣に感じられてならぬのである。いづれにしても南蠻畫史上、好個の一遺品と稱して不可あるまい。

橋原製